

[セッション2]——

総合司会 (山崎) それでは、後半の [セッション2] に入らせていただきますので、司会の方、よろしくお願いいたします。

司会 (日本) ただいまより、セッション2を始めさせていただきたいと思います。まず初めに先ほど行われましたセッション1のポイントを、日本側と韓国側のわれわれ両司会がそれぞれまとめて、いちばんはじめに皆さまにお伝えしたいと思います。

セッション1では「従軍慰安婦」の問題について日本の学生、韓国の学生それぞれの視点から闊達な意見が出されました。非常に有意義なものであったと思っております。

そのなかで「事実をどういうふうに認識するか」という問題が非常に大きく影響してくるのかなという印象を受けました。韓国側が受け取る日本に対する事実ですね、それと日本側の日本人が受け取る韓国に関する事実というものは、果たして同じものなのだろうかというところで、「事実とは、いったい何なのか」という疑問が明らかになったのではないかなと思っております。

セッション2は、「日韓関係の現状、私たちはこう変える」ということで、これからの日韓関係を視野に入れながら、現状を皆さんに議論していただきます。その際にもセッション1から通じて、事実をどういうふうに受け取るか、理解するかということが非常に大きな問題として出てくるのではないかなという感じを受けました。それぞれ日本と韓国が受け取る事実、どういったものをわれわれは事実として受け取るかという考えを混ぜながらセッション2の議論を行っていったらなと思っております。

マスコミの歪んだ報道、理由のない反感自省したい

司会 (韓国) まず、第1セッションのポイントについて私が補充説明を申し上げてから、韓国側の発表者の意見を聞きたいと思います。

日韓・韓日間の認識の差によって「慰安婦」問題についておたがいの考

え方が異なっている部分がある。認識の違いというものはやはりマスコミの歪められた報道だというふうに思います。両国のマスコミが正しい市民意識を定立するのに寄与すべきであるということでありまして、正しいそういった認識の定立を通じておたがい韓国と日本の、おたがいの理由なき反感、反日・反韓意識については自省しなければならないと思いますし、そうしたものを通じて新たな時代、新たな関係を形成していかなければならない、そのように思いました。

「慰安婦」問題について、補償の問題、償いの問題については、2つの意見がありました。1つは、補償においてはやはり政府レベルの補償はもう終わったことだから、個人の補償、道義的な問題として扱わなければならないという意見、また韓国側からは自らの間違いを認めて日本政府のほうから謝罪をすることが必要だ。それを示す必要があるという意見がありました。

第2セッションでは、やはりわれわれがこれからどのように貢献していくかという問題を取り扱うわけですが、まず韓国側の発表者のほうから「韓国における日本現象」をどのように見るかということ。関東大学のチェ・シンジュさんからまず発表がございます。

チェ・シンジュ 「韓国における日本現象」をいかに見るべきかについてお話しいたします。

韓国の中の日本現象を示す代表的な事例として、日本文化現象を挙げるができます。これは日本の文化が韓国社会の中に深く根を下ろす特有の現象を意味する言葉です。最近韓国社会においては、日本文化の開放がしだいに明確なイシューとして台頭しております。私たちはよく「日本文化がなだれ込んでくる」と言っています。歌、アニメ、ファッション、映画、キャラクター商品など、日本の大衆文化が大量に流入しています。韓国の新世代は、(日本)文化開放が正式に認められていないいまでも、関心のあるさまざまな分野において日本文化に慣れ親しんでいます。このような日本文化とのシンクロ現象、これはさまざまな弊害を伴いますけれども、考えようによっては双方にとって利益にもなり得ます。日本文化が容易に流入され、そして韓国の若者が日本文化に熱狂している要因としては2点挙げるができます。

日本の大衆文化のなだれ現象—弊害と利益

第1は、経済や文化の先進国としての日本文化の確固たる位置づけのためであります。第2は韓国人にとって馴染みやすい隣の国の文化という日本の文化の特徴であります。日本文化はリアリティーに富み、そして微に入り細にわたって細かい表現がなされるという特徴をもちます。一方マイナス面としましては、性の解放に伴う過度のエロティシズム、あるいは暴力性といったことを挙げるすることができます。こういった文化を受け入れるうえでプラス面マイナス面双方を考慮すべきであります。

日本のアニメは作品性、芸術性、おもしろさなどあらゆる面で韓国のものよりも勝っています。ですから、若者はもちろん子どもたちまでこれを好んでいます。『となりのトトロ』あるいは『もののけ姫』『千と千尋の神隠し』などの日本のアニメは、韓国でも高い人気を博しています。日本のアニメは細かい動作の1つ1つを繊細に描くりリアリティーをもっています。一方で青少年の場合は、高い水準の文化として自分たちの知的欲求を満たしてくれるという点で日本文化を好むことになります。世界第2の経済大国・日本で生み出された高水準の文化に触れることで、韓国の文化のレベルを高めるという積極的な姿勢が求められていると思います。

一方、日本の大衆文化のもつ、いわゆるエロティシズムあるいは暴力性は、韓国の子どもたちに幻想をもたらす悪影響を及ぼすと懸念の声もあります。私たちは日本文化をしっかりと見極めて、長所短所を選別できる力をもたなくてはなりません。無条件に日本の文化を排撃する文化国粹主義、あるいは日本文化を追従する文化追従主義、双方から脱して韓国の文化をより高い水準に引き上げるための努力を払うべきであります。日本も韓国人、あるいは韓国社会に対する偏見や優越感から脱して、過去の行動を反省し韓国を理解しようとする姿勢を示すべきであります。

このような相互の努力を土台にして、両国が歩み寄れるよう策を講じるべきであります。韓国人も日本に対する固定観念を破り、日本を許し妥協できるようしなければなりません。過去の歴史の産み落とした課題はこれから若い世代が解きほぐしていかなくてはなりません。しかしこのような問題、いかなる観点でとらえるかによって今後の日韓関係は変わり得ます。日韓関係の前進に向けてたがいに一歩ずつ譲り合う姿勢をもつことが重要

ではないかと思えます。

以上で発表を終えます。

司会 (日本) ありがとうございます。では続いて、日本側の学生より問題の提起をしていただきたいと思えます。明治大学の白井君お願いいたします。

白井 はい。いま韓国側の学生より日本文化について批判もありましたが、賞賛いただき、日本文化の中で育ってきた私としては非常にうれしく思っております。いままで第1セッションにおいて行われてきたのは、過去についてわれわれがどう考えるかということでした。そこでは事実をどう認識するかということが大きな問題であったと思えます。

第2セッションにおいて、われわれは未来をどう考えるかということに際しては、現在の事実よりはわれわれが将来日韓の関係をどうしたいのかというような将来における展望、あるいは日本人として韓国人としてというよりは、個人としてどういう未来図を描くかという願望が大切だと思えます。

そこで、私は、皆さんに1度聞いてみたい、軽くひとこと。日本と韓国はこれから明るい未来が築けるのかどうか。もっと単純に言えば、韓国とあるいは日本と仲よくしていきたいと思うのか？ それをただひとことだけ右のほうから。ひとことお願いします。

司会 (韓国) では、隣の方からひとことずつお願いできますか？

日本の学生 私は単純にいい関係を築きたいとすごく思えます。

日本の学生 私もいい関係を築いていきたいなとは思いますが、その前提として、日本も韓国も過去のことを、もう1回おたがいに認識しあわなきゃいけないなと思えます。

韓国の学生 私も同じです。日本と自由にいろんな点で共感しあえたらと思えます。アジアというこの地域で協力し合いながらやっていけたらと思えます。そのほうが、日本にも韓国にとってもいいと思うからです。双方からの歩み寄りというものが必要だと思えます。

韓国の学生 やはり日本といい関係が築けたらと思っております。築くべきだと思えます。しかし過去の過ちでありますとか、そういったことが友好を増進させるうえで非常に大きな足かせとなっている気がします。私た

ちがここに集まっているのも、おたがいの誤解をなくし日韓関係をさらによくしていくためだと思うんです。

韓国の学生 私も同じ意見です。日本と韓国が本当にいい関係を築き上げるには、過去の悪い記憶を払拭できなくてはなりません。そしておたがいに対して、理解することができればいい関係も生まれてくるのではないのでしょうか。

日本の学生 私は韓国のサブカルチャーがものすごく好きで、映画とかにしても『シュリ』とか『JSA』とか『猟奇的な彼女』とか、もう僕は大好きです、実は。ユンソナとかBoAとか、実は僕大好きなんですよ。

僕が韓国人と触れあった機会がありまして、2000年12月に、私はラグビーをしております、U19日本代表として韓国のU19代表と戦いました。試合は非常に勇猛果敢なタックルと強い突進で私たちは狼狽してしまっただけで、決勝で負けました。アジア大会で優勝したのは韓国です。試合はそれほど“熱闘”だったんですけど、試合のあとは肩組んで写真撮ったりして、非常に友好的な関係が築けるといえるのは僕はあると思うんですよ。僕はこれからの日韓関係というのは非常に楽しみです。以上です。

司会(韓国) 短くひとことずつご意見いただきました。韓国と日本の若者は、心からおたがいに仲よくなりたいという気持ちが強いような気がしました。

では、韓国のもう1人の学生にまた発表をお願いしたいと思います。イー・ユハクさん、「若者よ、目覚めよ」というテーマで発表があります。

韓国の学生 質問があります。(一人ずつの)発表はしないんですか？ 終わったんでしょうか？

司会(日本) 発表したかった方もいらっしゃるかと思うんですが、申し訳ありません。いま聞いてきた限りでは皆さん韓国と日本、仲よくしたいと言っています。先ほどの森君もいろいろと意見を戦わせてくれたんですが、彼にしても個人としては韓国の同じ世代の若者たちと仲よくできるといっています。

僕が考えるに、日本と韓国はおそらく個人のレベルでは非常に近い存在ではないだろうかと思います。大変顔も姿かたちも似ています。僕自身よく韓国人と間違われるんですが、そのように非常に個人としてはとても近

いの、いつまでたっても仲よくなれないのは政治的な問題が、本来仲よ
いはずの日韓の関係をこじらせているように感じます。僕は日韓の関係は
民間主導であるべきだと考えます。民間の自然な感情から生まれる親近感
情というのを大切にすべきだと思います。以上。

司会（韓国）では次に、西江大学国際大学院のイー・ユハクさん、発表し
てください。

イー・ユハク この場にいるのは、みんな若いです。ですから、私は「若
者よ、目覚めよ」というテーマを掲げてみました。

21世紀を迎えグローバル化の波が押し寄せるなか、私たちはさまざまな
国の文化と情報を共有しています。しかし、その世界化というのが主だっ
たパラダイムであっても、韓国の国際関係を考えるうえでよく言われる
「近くて遠い国」という日本の存在を見過ごすことはできません。1500年
にわたる長き交流のなかで、両国は敵ではないきょうだいの国でありまし
た。にもかかわらず韓国の近代史、現代史における日本の侵略、これはい
まだに痛みを伴う記憶として残っています。そのためもありまして韓国は
日本に対し、これまで色眼鏡をかけて接してきました。

既成世代と異なる日本観。X JAPAN、安室奈美恵…

しかし、いまや日本に対する目、あるいは日本に対する視点を変えるべ
き時が来たと思っております。その実、日本の敗戦から50年以上過ぎた
現在、韓国の若い人たちの日本に対する思いは既成世代のそれとは異なり
ます。去年の日韓ワールドカップ共同開催の成功、あるいは日本の大衆文
化の開放、さらに日本の市民運動、これは既存の両国関係を変えつつある
さまざまな証左と言えます。

青少年を対象としたアンケート調査によりますと、韓国で日本の文房具
を使ったことがある子どもたちは92%に達しています。日本のマンガを読
んだことがある子は89.7%、日本の映画を観たことがある子は89.6%でし
た。またX-JAPANですとか安室奈美恵に熱狂し、また日本のアニメのマ
ニアとなった若い人たちも多数います。その実日本文化の開放はさしたる
悪影響を及ぼすこともありませんでした。日本文化が韓国人にとって決し
て異質なものではないという事実を示すものであります。

日本で行われた別の世論調査によりますと、諸外国との交流に際してどの地域の国に重点をおくべきかと考えるかという設問がありました。この質問に対して東アジア、韓国、中国というふうに答えた人の比率が44.9%で最も高かったと言います。韓国に対して親しみを感じるといった人たちの比率は51.4%でした。親しみを感じないといった人の44%を上回ったのです。そして20代の若い人たちのあいだで親しみを感じると答えた人が非常に多かったこともわかっています。

このような世論調査の結果は両国の若者が色眼鏡をはずして、現実をありのまま受け入れていることの1つの証拠ではないでしょうか。日韓両国の不幸な歴史について考えてみますと、これもまた大きな変化に直面しているような気がします。既成世代は歴史認識を強調しつつ、「内なる民族主義」を唱えました。つまり民族のアイデンティティーというものを標榜しました。しかし同時に他方では、いわゆる外部の変化に積極的に対応しようという、いわゆる「開かれた民族主義」を掲げました。

このような歴史教育のダブルスタンダードのなかで、日本帝国主義による植民地としての遺産の清算、あるいは自由民主国家の建設、あるいは祖国の統一。こういったもろもろのことを考えなくてはならなかった既成世代の歴史教育、これは内なる民族主義がどうしても強調されることになりました。民族の歴史でありますとか、誇りでありますとか、愛国心。そういったものが強調されました。そのために日本に対する部分においても理性よりは感情を優先し、あるいは青少年に対しては無条件の日本に対する敵対心というものを強要してきたというのも事実だと思います。

日本の場合も状況はさほど変わらないでしょう。日本の既成世代は原爆の被害、戦後の国家建設、あるいは経済発展の過程で多大なる犠牲を強いられたと言えます。このような過程で国家至上主義、日本第一主義といった感情が、気持ちが自然に強調されたと思います。

歴史教科書の問題や日本の「慰安婦」問題は歴史問題が両国関係の足かせとなってきた代表的な事例だと思われます。こうした問題においては、政府の公式的、あるいは外交的立場に依存して解決策を模索するということには、多くの困難を伴うと思います。こうした問題については、両国民の閉鎖的な民族主義的な感情のみで解決される問題ではないと思われます。

今後の日韓・韓日関係の主体と要素が変化しているということを前提として、合理的かつ具体的な問題提起とアクセス—接近方法—が必要だと思います。感情にあまりに偏った圧力行使は両国間の建設的な外交関係にもマイナスの効果をもたらす可能性が高い。教科書問題は地道かつ論理的方法で、歴史学者や社会学者を通じて学問的に具体的な事実を究明する姿勢がまず先行しなければなりません。また政府のみによるのではなく、NGOなどの市民団体との協力を通じて両国の市民社会と若い世代の相互理解の土台をつくりあげていくことが重要だと思います。なぜなら、私たちの生きる世界は、すでに政府間の国際関係だけではなく、民間レベルでの協力と交流が進む複合的な相互依存の時代であるからであります。

日本でいわゆる右翼教科書の採択を阻止したいちばんの功労者は、1000回以上集会を開きながら、地道に問題を取り上げてきた沈黙した多くの保護者と教科書を採択委員を説得した日本の市民団体でした。「慰安婦」問題でもやはりそうです。「慰安婦問題と日本の市民運動」という本でも何度も言及されているように、日本の良心的市民勢力等はただちに謝罪と賠償金が国家を通じて行われる見込みがないということを認識していたので、アジア女性基金という団体を設立するに至りました。

この団体の趣旨は、国民の協力を経て、補償金を総理大臣のお詫びの手紙と共に被害者たちに伝達し、彼らの要求通り私生活を最大限補償し、政府も医療・福祉事業を支援する団体に支援する。また2度とあのような過ちを繰り返さないために事実の究明と歴史教育を体系的に行っていくことにあるといえます。

もちろん補償だけがかつて日本人の行為自体を打ち消すことはできませんし、被害者の苦痛、あるいはそういった痛みをすべて償うことはできませんけれども、これは一人の人間としての人権が、凄惨なまでに踏みつけにされた彼女たちに対する人間対人間の人道的な道理だと申し上げることができます。

感情にしばられず事実と認識から

こうした問題に接近するためには、第1に正確な事実調査が必要です。私たちが日本の多くの青少年が韓日関係の歴史問題に対してはなはだしく

認識が不足しているという事実を理解しなければならないと思います。理由もなくこれらを批判する前に、正確な事実を調査し教えてあげる必要があると思います。そして韓国人は民族主義に依存して日本を無条件かつ感情的に攻め立てる前に、日本社会の性格や変化について正しく理解しなければなりません。単純なマスコミの報道が両国の真実をすべて伝えてくれることは決してありません。明確な事実と歴史認識を基礎としたときに、両国関係は未来志向的な関係のうえに発展することができます。

2 番目にこうした韓日・日韓問題は性急かつ短期的なものではなく、長期的な課題によってその格差を減らすための努力を慎重に行っていかなければなりません。同時に両国政府は両者間においても、また多国間においても行き違いや葛藤を調節する、そういった窓口をもたなければなりません。私たちは過去に縛られた関係を清算し歴史から解放された関係によって発展しなければなりません。そのためには変化しつつある若い世代が重要な役割を果たすでしょう。覚醒した若者たちの思考が、いままで縛られてきた両国関係の糸口をほどく鍵になるはずだと私は信じております。

以上であります、ありがとうございました。

司会 (日本) では続いて、早稲田大学の留学生でいらっしやいます、ナ・キョンスさんよりご自身の日本での経験を踏まえたかたちで発表していただきたいと思います、よろしく願いいたします。

ナ・キョンス 日本の留学生としての意見だと思えますけれども、日本の中には何千人、何万人の留学生がいると思うんですけれども、その代表として私が言っているわけではないから誤解しないでください。

私は日本に来て1年10カ月ほど経ちましたけれども、やっぱり自分なりのつらい経験もあったし、また自分なりに勉強もがんばってやってきたし、そのなかでも私の専攻は国際関係学だから、それだけじゃなくて日本の中で私はどういう事を感じるか、日本のふつうの一般市民の生き方はどういう生き方なのか、そういうことにちょっと興味をもちながら自分の専攻をがんばりたいなと思ってきました。その前に日本人の方に質問があるんですけれども、韓国という国に関してはちょっと違和感があるんですけれども、韓国という民族というか、人々に対してどういうイメージがですね、思い浮かぶんですか？ 何でもいいです、答えてください。日本人の

方々から。

司会(日本) どなたかイメージをおっしゃっていただける日本側の学生さんいらっしゃいますか？

ナ・キョンス ものに対して、あるいは人に対しても…。

日本の学生 私は行ったことがないので、軽率に向こうの人の状況を判断するのはよくないのかもしれませんが、私の何となくメディアから受けている感情としては、結婚式、葬式、すごく感情を吐露していらっしゃると。受験の際にもものすごくなんか執念をもってやってらっしゃる。だからそういう意味で、いつもがんばっているなというそういう感じがするのが私の印象でしょうか。

ナ・キョンス どうもありがとうございました。実はですね、今年の1月15日から1カ月くらいかけて『月刊アリラン』という在日のなかの同胞社会の雑誌があるんですけども、その調べによると、日本人にとって韓国人のイメージとして第1番目は食べ物です。政治、人物じゃなくて、食べ物のなかでキムチとビビンバ、焼き肉ですね。これは笑いごとではないと思うんですね。そのくらい食べ物というのは人間にとっていちばん大事なところだと思うんですけどね、そういうことに興味をもつということは、ものすごい親しくなったということを僕は実感しました。

北朝鮮を入れて見ること「価値観の共有」ができるか

やはり知識人としての考え方としては、食べ物はひとつの文化論的な面ではすごくいいと思うのですが、それだけでは済まないと思います。文化論的な観点からも大事だけでも、いろんな方向から日韓関係を語ることはできると、私は思います。そういう面では2つ3つくらい取り上げたいと思うんですね。

まず1つは、私は日韓関係は、それを超えて日韓関係を見ようかと考え方をもっているんですが、それはどういう意味かと言うと、真の日韓関係というのはどういうものなのか。それはまだいくら考えても答えは出ないんですね。これからいくらがんばって考えても答えは出ないと思うくらい難しい関係が日韓関係だと思うんです。1つの答えみたいなのを考えたのは、日韓関係を超えて別の方向から見てみようかと。それは日韓関係を位置づ

けるためには枠組みが必要だと私は思うんです。もちろん日本と韓国の方向から見ることもできるけども、私は日本に来て約2年くらいですけども、やはりいちばん得られたことは、もうちょっと冷静に見ることができたということです。

それどういうことかと言うと、韓国側からじゃなくて、日本側からもうちょっと世界、国際社会という観点から見ようとしてきたんです。そこで考えると、日韓関係というのは日韓関係だけでは済まない、そのなかでいちばん大事なことだと思うのは、北朝鮮問題だと思うんです。われわれ歴史の問題を語ってきましたけれども、やっぱり現在の話、これからの話になると、北朝鮮を除いてはいけないと思うんです。これはいまかなり緊張している。そういうことを考えてみると、やっぱり北朝鮮をどうとらえてきたのか、これからどうなるのか、それは日韓関係のなかでいちばん大事なポイントだと思うんです。それはイー先生もご専門だと思うんですけども、私はずっと日本のマスコミのなかで北朝鮮に対するイメージをずっと追って来ました。それはやっぱり違和感がかなりありまして、もちろん北朝鮮と私同じ民族だからそういう考えじゃなくて、北朝鮮に対するそういう認識です、ね、日本の中ではかなり偏っているんじゃないか。もうちょっと冷静になる必要があると思います。

もちろん政権に対する批判は合っているところもあるし、いろいろあるんですけども。北朝鮮を見る目線というのはいろんな方向から見られるということ。例えば、政治体制とかそういうことも1つの例として、またもうひとつは北朝鮮のふつうの庶民の生活ぶり、もう1つはいま問題になっている脱北者問題。いろいろ考えられるんですけども、やっぱり日韓関係というのは、「日韓朝」まで入れないとだめだと思います。で、それをもう少し広く言うと、やっぱり東アジアの国際社会の中で、日韓関係を語ったほうがいいと思います。

2番目は、きょうちょっと感じたのは、このセッションが「現在・過去・未来」という分け方だったと思うんですけども、やっぱりそれは区切りができるか、私できないと思います。ちょうどこのあいだ、ノ・ムヒョン大統領が日本に来て、「私は戦後世代だから」、その意味を日本人の方はどうとらえたかわからないのですが、私はそれをどうとらえたかと言うと、

それは過去を全部忘れて現在を含めて未来だけ考えていきましょうという意味より、やっぱりそれは過去を清算するか、清算できないかもしれませんけれども、それを踏まえたうえでやっぱり未来を考えましょうというふうに私はとらえました。

そういうことを考えると、ほんとに過去の歴史問題が解決できるかというか、それは私、実は自信はないんですね。でもできることは、われわれが歴史に関してもそうだし、これからの未来のことを語るときもそうだし、価値観の共有だと思うんですね。日本側は正しい、韓国側は正しくない、間違い、また日本側がよい・悪いという感覚ではなくて、おたがいに違いを認めたとえでの価値観を共有できるかどうか、そこで糸口というか、手がかりができるんじゃないかと私は思います。こういう場でもありますね、もちろん各論的な話し合い、総論的、一般論的な結論になるかもしれませんが、ひとつの場に集まっておたがい、どういう考えをもっているのかがわかる非常によいチャンスだと思います。

そういうことから、提起したいのは、われわれ北朝鮮の問題をどう見るのか、それが1つと、これから価値観の共有というのはどういうものなのか、それに対して具体的に何ができるか、それをひとつの問題提起としたいです。

司会 (日本) ありがとうございます。では、具体的にディスカッションに入っていこうと思います。こういったことに重点をおいていただきたいということを、私の方から2点挙げようと思います。

第1点目、韓国のなかの日本現象ということで先ほどもお話がありましたけれども、こういったことも議論のなかに織り交ぜながら話していただきたい。同じように日本のなかの韓国現象といったことも皆さん、お話のなかに入れていただけたらと思います。

第2点目に先月6月のはじめに来日されましたノ・ムヒョン大統領の発言に関して、どういった感情、感覚をもって日本側、韓国側それぞれがその発言を聞いたのかということも、ディスカッションを通して意見が出ればと思っております。

では以上を踏まえまして、発言のある方は挙手をお願いします。

日本の学生 はい、まず私のなかの韓国現象として、私の部屋のテレビは

サムソン製なんです、ノ・ムヒョン大統領の発言に関して、今回もキム・デジュン前大統領に続いていわゆる過去問題に対して何も言わなかったということで、騒いでいる新聞があるんですけど、私としては外国に初めて元首として来て、これからよろしくお願ひしますという場で、過去のことを蒸し返すほうがナンセンスなんじゃないかなと。国際礼儀から考えてみても、最初の会うときなんだから、こういう昔の話をしなかったことでいろいろと言うこと自体が私にはちょっと理解できないというか、ナンセンスじゃないかなという感想をもちました。

日本の学生 いまの発言に対してですけど、今回ノ・ムヒョン大統領が来日した際に、日本側の天皇と韓国大統領との席で、初めて天皇は日本の過去に、韓国にしたことに対して謝るというか、そうした言葉を初めてかけたという会談だったんですけど、やっぱり今回のノ・ムヒョン来日というのはいままでのものとはまったく違って、未来だけを見ていこうというものだったと思います。

司会（韓国） 補足意見、もっと違う意見ありますか？

ここに来るまでもっていた「反日」感情

韓国の学生 では、私の中にある日本現象についてお話しします。

私はここに来る前までは、日本に対して別の物差しをもっていたような気がします。韓国では日本の文化が非常に蔓延しています。日本のマンガは私も大好きです。日本のアニメも好きですし映画も好きです。しかし他方では日本は民族主義の色あいの強い国だ。ナショナリズムが強い国だ。危険な国だというようなイメージももっています。また、韓国人のことを嫌っているのではないだろうかというような、そして私自身いわれなき反日感情のようなものももっています。

しかしこの場に臨んで、そして午前中議論した日本の学生と昼食をともにしながら、自分が間違っていたということに気がつきました。言葉の壁はありますが、笑顔で会話ができましたし、そして連絡先を教えあうことで心を開くことができました。これからの日韓関係では、おたがいを無視する、あるいはおたがいをないがしろにする状態ではやっていけないと思うんです。おたがいを認め、そして本当に未来志向的な関係にしてい

なくてはならないと思いました。

司会(韓国) 日本に対して先入観をもってたという主旨の発言だったと思います。次に日本側で何かありますか？

日本の学生 非常に賛成で、日本側にとっても韓国に対して、僕はこの元禄時代に活躍した雨森芳洲(あめのもり・ほうしゅう)という方の本を読んで非常に思ったのが、例えば韓国でも有名で豊臣秀吉もたぶん歴史に非常に出来ると思うんですが、その朝鮮出兵の無駄な意義とか、そういう名分のない戦争を起さない、意味のないことをしないということをこの人は非常に述べているんですけども、私たちはこうした議論を基にして世界へ訴える、あるいは友達を通して少しずつ広げていくということが大切なんだなと感じました。

司会(日本) では、ほかに日本の学生、韓国の学生問わず補足や別の意見のある方はいらっしゃいますでしょうか？

お互いを認めあい、学びあう関係へ

韓国の学生 私は日本の学生に質問したいと思います。日本と韓国の明るい未来のためにはたがいから学ぶ姿勢が必要です。学ぶ点も多いとおもっています。私、日本に初めてまいりました。日本に着いてまだ2日しか経っていません。でもいろいろ感じました。最も印象的だったのは、日本の学生が非常に自信に満ちていたということ。そして、日本の国民は率先垂範しているということ。これについて非常に考えさせられ、学ぶことができました。

午前中、日本と韓国の学生で議論をしました。そして昼食もともにしました。日本の学生が非常に自信に満ちていた、自分の意見を堂々と披露するという点で非常に感心しました。ホテルでゴミ箱を見ました。韓国でもゴミ袋にゴミを入れるんですけども、でもゴミ箱に入れない人もいます。すごく汚い感じがしますよね。しかし、日本のゴミ箱を見ました。そうするとまわりに全然ゴミが落ちていませんでした。そこに、例えばタバコの吸殻を投げ込むというのは、非常に申し訳ないような気がしました。

日本の市民の皆さんに感謝したい気持ちも生まれました。言葉もわかりませんし、英語もあまりじょうずじゃないんですけども、日本のあるメ

ガネ屋さんに行ったのですが、非常に親切でした。タダで直していただきました。日本の市民、あるいは日本人に対して、何と言いましょか、日本の国民から学ぶべきことが多いと思いました。自信がある、そして率先垂範しているということ。学ぶべきだと思いました。それでは、日本の方々は韓国の人から何を学ぶべきだとお考えでしょうか？ 日本の皆さん、お答えいただきたいと思います。

司会(韓国) 非常に、日本に対していい印象を受けたというお話だったと思います。それでは、日本の皆さんのなかで、韓国の人からこういう印象を受けたということで、何かございますか？

日本の学生 初めて韓国へ行ったのは大学4年生のときです。年齢がばれるかもしれませんが1996年くらいだったと思います。そのときに、やはり加害者的な意識があったんですね、日本人として。ちょっと怖いなという気持ちをもちながら、正直本当に怖い気持ちで行きました。中国へ行った友だちはすごくにらまれて帰ってきたから、怖いよ、アジアのほかの国は怖いよ。そう言われながら行ったので、すごく恐怖感をもちながら行ったんですけど、まず飛行機から金浦空港を見て「アパートが多いな」という印象をもちながら降り立って、実際に見てみると、ビルもいる人間というか人もみんな同じ、ただ文字が丸と棒だになっていう程度で、ほとんど同じだと思っていたんです。

目的は、卒業論文だったんですけどね。その卒業論文のためにアンケート調査をしていたんですが、そのなかで、友達に通訳に入ってくれて、大学時代の韓国人の友人が連れて行ってくれた場所が、独立宣言をした場所、パゴダ公園(現・タブコル公園)でした。そういう場所なので、ちょっと意味はあるし、おじいちゃんがたくさんいるよと言われて行ったら、ほんとおじいちゃんだらけだったんですね。もう、駅のあたりからおじいちゃんがいっぱいいて、おじいちゃんたちだからきっと日本人のこと嫌いだろうとか、もうどんな罵倒を浴びるかということ覚悟しながら中に入っていったんですけど、罵倒どころか、すごく優しい言葉をたくさんもらいました。

タブコル公園で、おじいさんから温かいコーヒー

そのなかの1つは、「よく来てくれた」と言ってくれたおじいちゃんがいるんですね。そのおじいちゃんは戦時中に教えてもらった日本人の先生がすごくいい先生だったから、日本人に会えてうれしいよと言ってくれたり、ほかのおじいちゃんは、「昔いろいろあった。でもそれは政治家が悪いというか国家が悪い。国民が悪いんじゃないし、未来のためには、昔自分もいろいろあったけど仲よくしようよ、未来のために皆でがんばんなきゃいけないんだよ」と話をしてくれて、私はそこですごく緊張感が解けて涙がでちゃったんですね。そしたらあるおじいさんが温かいコーヒーを持って来てくれたりとか、そういう経験をしたんですね、初めて行ったときに。

で、思ったほどじゃないんだな、やっぱり加害者としての意識みたいなものをもってしまったのがいけない。さっき被害者・加害者というのがありましたが、加害者意識というもので、逆に韓国のベトナムの話もさっきありましたが、韓国がベトナムに対してある加害者意識の話で、留学中に私のクラスにいたベトナム人がある日、バスに乗ったら韓国のおじさんが「どこから来たの？」って言うんで、ベトナムからだって言ったら「ただでいいよ」とバスをただにしてもらったとかあったらしいんです。それぞれ、そういういろんな意識はあると思うんですが、未来に向かっては同じだと思うんですね。歴史教科書の問題も。

私はいま日本語を教えているんですが、学生たちがこのあいだ中国人、台湾人、韓国人でいろんな話が出て、歴史の話が出てきたら「話が違う。習ったのと違う」という話になったけど、最終的に韓国人の学生が「それはしょうがないよ。自分の国をよく書いちゃうのはしょうがないよ」という話で締めくくられたんですが、そういうのはどの国も共通だと思うんですね。だから未来に向かっては、いままでの問題がいろいろあると思いますが、もっと建設的に仲よく同じ人間として、同じ人間としてと発言をしたい。私は3分の1韓国人の血が混ざっています。うちの祖父は韓国人でしたが、会ったこともありません。

そういう関係もあって韓国にすごく興味もあるし、一時期すごく私は韓国人なのか、日本人なのか迷った時期もあったけど、いや、地球人、人間だっと思っています。だから同じ人間として、みんなとがんばってい

けたらいいなと思っています。この場はすごくいい場だなと思います。

司会(韓国) ありがとうございます。先入観というものがいかに危険かと、実際に市民レベルで交流することの大切さというのを非常に語っていただけたと思います。ありがとうございました。

では、先ほど韓国側のお学生の方がされた質問の続きとかたちでもかまいませんし、また新たに何か発言されてもかまいませんので、韓国、日本問わずどなたかいらっしゃったら挙手をしていただきたいと思います。

日本の学生 先ほどお話しされた方と重なる部分があるんですけども、私が初めて韓国に行ったのが2000年だったんですけど、そのときは韓国語も知らずに、韓国はどういう国かということもよくわからずに、ただ韓国に飛び込んだんですけども、そのときに会ったその日に韓国人の方が一緒に食事に誘ってくれたりだとか、「行きたいところあったら言え」とか言ってくれて、韓国を案内してくれて、なんでこんなに初めてあった人にここまでしてくれるのかという、ものすごい感動を受けました。

その反面、日本に帰ってきてからもいろいろ歴史教科書の問題だとか、靖国神社参拝の問題に対して韓国人の方が韓国で反対デモをやっていたりするのを見ていて、やっぱりそういうのはぬぐえないものだなというのがあって、ものすごく自分の中には日本人ということに関係なくよくしてくれる韓国人がいるのと、日本に対してそういった運動をしている韓国人がいるというので、ものすごく自分の中ではどういうことなのかよくわからなくなって、そういうことも実際知る目的もありまして、去年1年間留学をしてきたんです。やはり最初の印象と変わらずものすごく個人レベルでは親切で、時には日本人同士では味わえないような親切を受けたりだとか、ほんとにいい経験をさせてもらったんです。

去年ワールドカップが共同開催であったんですけども、そのときたまたまワールドカップの開催期間は僕は日本にいました。そのときに日本が先に負けて、韓国がずっと勝ち残っている。そういうとき日本が負けたときに韓国チームを応援している日本人の姿というのがテレビやマスコミを通じて報道されていて、いい傾向にあるんだなと、日本人も韓国人も応援していていい傾向にあるという印象を受けて、その話を韓国にいる日本の友達に話したんですけども、「韓国ではどうだった？」と聞くと、韓国はそう

ではなかったというのです。日本の報道では日本戦がまず先にあってその後韓国戦が日程的にあったんですけども、日本の共同開催についてどう思うかとか、おたがいベスト16に入ったことに対してどう思うかとかというインタビューでは、一緒に勝ち上がって行きたいだとか、あとは決勝で会いたいとか、そういうふうなインタビューを日本のテレビで観ていたんですけども、韓国でもそういう方ばかりだなと思っていたんですけど、実際韓国でワールドカップの期間を過ごした日本人の話を見ると、日本戦を韓国人の人に一緒に観ようと誘われて飲食店で一緒に観ていたらいいんですけども、その一緒に観ようと言った人はものすごく日本人に対してよくしてくれる方で、そういった席にも誘ってくれる人なんですけども、相手チームに点を入れられたときにまわりにいる韓国人は拍手喝采で大喜びしていたっていうことを聞いたんですね。

その一緒に誘ってくれた友達は何のすごくすまそうにしていたということを知りまして、一緒に勝ち上がっていきたいという日本で観たインタビューでの答えとは違うのかなという印象を受けました。もう1つ驚くことには日本がシュートを入れると、いままで相手チームがリードしていて、日本負けるだろうなとみていた韓国人がいきなり立ち上がって、自分のいすを蹴り上げたりだとか、ブーイングをしていたというのを聞いて、その人はもう韓国人と一緒に日本戦は観られないと、その人だけだろうなと思ったらほかの日本人留学生もみんなそういうことを口を揃えて言っているわけですよ。

一緒に観ていたわけでもないし、誘われて見ていたのに、ほぼそういう人が言っているということは、個人的にはものすごく親切にしてくれるんですが、やっぱり日本という国になるとちょっと別の問題になってくるのかなと思いました。そこには国家と個人との二重構造と言うんですか、そういうものがあるなと思いました。それでそういうことをこの席ですということ韓国の人に話したんですけども、「個人的によくなっているんだったらそれでいいじゃないか」というようなことを言われまして、昔はもっとひどかったんだと、まだ、僕がそういったところでショックを受けたという話をしたら、そんなのショックじゃないと言われました。

司会 (韓国) ありがとうございます。日韓関係を取り扱うときに、国家的

な次元、あるいは個人的な次元での見方の違い、また国家次元では違うということがありますね。他に何か意見がありましたら、どうぞお話しください。

韓国の学生 いまのことについて私の考えをちょっとお話しして、私の考えについてもお話しをしたいと思います。

私も非常にスポーツが大好きでスポーツを通じて、あるいは韓国とほかの国との試合については別として、なぜか日韓間の関係については私もなぜかわからないのですが、ライバル心と言いますかプライドと言いますか、そういったものが先にたつんですね。いまこうして話をしている1つの問題かと思えますけれども、日本は日本で、韓国は韓国でおたがいにいろんな事情があって、真実とは関係なく先入観とか、そういったものがあって、日本側からもお話がありましたけれども、こういう権威的な事情で私もそういう見方をしているのではないかという先入観が作りあげられてきたのではないかと思います。

先入観や誤解を解く意見交換できる場を

韓国、日本はおたがいに一緒になれない、そういった道をいままで歩いてきた。おたがいに違う道を歩いてきた。日韓関係というものを過去の枠にしばられずにそれに執着してこの問題を解決しようというのではなくて、おたがいに異なる道を歩いてきたように、この異なる道というのもある地点では交わる交差点がある。この場もまさにその交差点だと思んですが、この交差点が多くできていけば、おたがいの先入観ですとか、誤解、そういったものを解消する個人と個人が心を開いていくことができるのではないかと思います。こうした望ましい日韓関係、小さな集まりであってもおたがいの意見を交換することによって、それがひいてはより大きなものになって望ましい日韓関係、韓日関係へとつながっていくのではないかと、そういったことを考えています。

司会(日本) ありがとうございます。日本側の学生さんで補足あるいは別の話題などございますでしょうか？

日本の学生 去年ワールドカップの試合があったときに、日本と韓国の関係というのが先ほどお話しされたように、韓国のほうでは反応が微妙で

あったということは僕も聞いています。それはともかくとして、日本であるとき、一時的にはあれ、韓国ブームのようなものはあったことは韓国の学生さんも多少知っていると思います。去年すごく韓国のドラマであるとか、映画であるとか、あるいはそういった文化を紹介するようなテレビの番組などが非常にたくさんあったんですが、1年経って、いま僕が思うのは、ほんとにブームでしかなかったなということです。

僕は大学で韓国語を勉強しているんですが、そのクラスで勉強している学生は僕を含めて4人しかいません。つまり大学でたった4人しか韓国語を勉強しようとする学生がいません。また韓国の政治史に関する授業もあるんですが、これをとっている学生もたった6人しかいません。韓国において日本の大衆文化に対する興味が非常に強いというのは、僕も韓国に行つてすごく思いました。本屋のマンガのコーナーに並んでいる本のなかに日本のマンガが非常に多いこと、とても驚きました。韓国の同じ世代の人たちが日本ではやっている音楽や漫画やアニメなどに非常に興味をもっているのもよく知っています。

けれども日本側と本当に違うのは、日本側の興味というのが韓国に比べて非常に低いレベルにあるということです。韓国に対する認識というのも、興味の低さから大きな誤解を招いているのではないかと思います。この会場に集まった皆さんのなかにも韓国に行ったことのない方、また韓国側の学生の方も日本に来るのはこれが初めてだという方が非常に多くいます。やはり同じ人間というような認識をもつためには直に向こうに行つて、あるいはこっちに来て、それぞれ交流をもつ以外にないと思います。僕もこのあいだ初めて韓国に行き、韓国の人のすごく人情の厚いところ、それにすごく心を動かされました。韓国に対するイメージも大きく変わりました。交流を個々人が重ねていく以外に、認識の相違を埋める手段はないと思います。

日本と韓国は幸いにして非常に近い距離にあります。努力して交流の機会をもとうとか、そういうことをしなくても、自然にもっと簡単に交流をもてる位置におたがいがいます。問題を解決する最初の一步というのは、やはり個々人が、もっと強く相手に対して興味を抱くことだと思います。

司会 (韓国) いい結論が出たように思います。いまから10分間、質疑応

答の時間をもちたいと思います。会場に多くの方がいらっしゃいます。質問があれば、していただきたいと思います。

会場(韓国) 私は7年前に福岡に来てビジネスをしながらいま日本でヘンピオ運動を行っています。本当に、国家支配権力と個人と分けて考えるのがすごく重要と思うんですね。その観点で、本当にいま東北アジアの緊張が強くなっているときに、韓国から来た学生たちをお願いしたいことは、本当に韓国とかアジアに関心をもってくれる日本人の価値をちゃんと考えてほしいんですね。日本の人件費の高い商品を買うことができるのはアメリカ、ヨーロッパのマーケットが大きいでしょう？ その観点で本当にアジアのことを考えてくれるこの日本の人の価値はすごく高いです。

それと歴史認識の問題は国家民族のアイデンティティーの問題だから、立場をチェンジして、簡単に私たちひどいことやったって言うことはできないんです。立場チェンジしてみれば、韓国だってベトナムに言うことできないでしょ？ 相手の民族国家はアメリカの支配権力がつくった観念だから。個人の観点から、自分の感情をおいとして、ほんとに相手の立場を100%理解しようとするのか。いま森さんが言っている、その世界を100%受け入れる韓国人になれないと、本当に日本とコミュニケーションができないんです。

日本と仲よくなろうとするなら、本当に国家民族の観点をおいて、相手の立場になって解ろうとすることです。例えば加害者の立場は、早く忘れたいのです。

それと日本のエネルギー、日本は侍のエネルギーです。島文明だから違う文明と出会いがそんなになかったのです。だから特別な文化文明もっているし、エネルギーは単一の文化なのね。礼を見ても1回で終わるんです。「本当に申し訳ございません、間違えました」すればね、切腹の文化もっている。韓国は3回でしょ？ 1回負けたとしても2回3回勝つんだから、それで「負けました」が簡単にできる民族なの。日本と韓国はエネルギーが違うんです。それをほんとに理解することがすごく重要。

私は世界人類の平和を考えると、本当に日本の国民個人個人と韓国国民個人個人がどのくらい本当に愛するのか、それが平和運動のキーワードだって思う。西洋の文明ルネッサンスはね、個人の目覚めだったんだよ。

東洋のルネッサンスは起こっていないんです、まだ。西洋のルネッサンスはイタリアの半島のエネルギーとイギリスの島エネルギーでできたんです。韓国の半島のエネルギーと日本の島エネルギー？ 考えてみてください。本当にイタリア半島のエネルギーがルネッサンスの芸術とか思想哲学にあったでしょ？ イギリスにいて名誉革命が起きるじゃないですか。日本はね、世界でいちばんすばらしい平和憲法をもっています。イギリスの名誉革命、産業革命、いま日本の企業がようやくマインドとかモラルに関心をもちはじめたんです。いままでは物をよくつくって売る、そこで勝負していたんです。アメリカ、ヨーロッパが何百年間やった伝統を、原子爆弾でつぶれて、その後その1つに集中してオリジナルを超える文化文明もっているのです。それを韓国人が認めるべきです。

韓国は個人の主義主張。「和」の世界を学ばないと

韓国は個人個人が自分の主義主張は強い。バイタリティーあふれる、それはメリット。だけど日本の和の世界、これを私たちが学ばないと、平和が生まれません。日本側で言っている、まだ戦争は終わってないというような民族差別意識。そこについて本当に日本の国民個人個人が目覚めてほしいんです。命の魂はみんな同じだし、特に日本と韓国は長い歴史がある。いまもDNA鑑定すればみんな同じと言っているじゃないですか。未来は、1人の人間が国籍3個も4個ももっているんですよ。国家民族を超えて、若い皆さんが本当に東北アジアの平和を守ってね、東洋のルネッサンス、共同の価値観をもってアメリカ、ヨーロッパに教えなければならぬ。その観点で本当に仲よくなってほしい。

このアジアに関心もっている日本人は大事なんです。私がね、平和運動をするなかで、たくさんの良心のある日本人いっぱいいます。だから右翼の人の気持ちも十分にわかって、その右翼以上に右翼にならなければならないし、明るい未来に対して自信がある、東洋のルネッサンスを一緒につくろう。その自信がある人間なら、自動的に「ああ国家なんか、民族なんか、観念じゃないか」。ラーメンを食べないんです、国家民族は。個人はラーメン食べる、リンゴ食べる。人間は個人だよ。

司会(日本) 非常に白熱されて大変結構なんですけど、限られた時間という

こともございまして、多くの方に発言していただきたいので、どうもありがとうございました。会場で何かご意見のある方、ぜひ挙手をしていただきたいと思います。

会場 中央大学2年の石井順平と申します。いまの議論のなかでたびたび歴史認識という言葉が出てきたんですけど、そこで私がちょっと思ったことを簡単に言わせていただきたいと思います。

現在日本が、例えば友好的だと言われているアメリカとかイギリスとかフランスとか欧米の国とも、日本は歴史認識で、それぞれ協議したりすることがあまり起きていないような気がするんですね。例えば、原爆の話をすればアメリカは戦争を早く終わらせるために落としたと言う。日本はそれはおかしい—そういう意見はあると思うんですけども、結局、日本はアメリカなどとはそういう議論をしてこなかったわけです。

それでいまここで日本は韓国と歴史認識について話して、最終的に合意が結ばれてこの日韓の関係が進展していくならば、それは日本にとっても韓国にとっても、いまあるほかの国以上の関係を結んでいけると思うんです。この歴史認識というのは非常に大きな問題で、それを解決するのは難しいと暗く考えないで、逆にこの問題が解決したときに、それこそ世界でいちばん仲のよい二国間関係が結べるんじゃないか。そういうふうにも明るい発想で臨んでいけたらいいのではないかと思います、ここで発言をさせていただきました。

司会 (韓国) ありがとうございます。あとお1人、短めにお願いします。

お互いの言葉を勉強すること

韓国・留学生 両方を経験しているということで、ひとことでも言えるところがあると思います。まず、おたがいに当てはまる話かもしれませんが、おたがいの言葉を勉強したほうがいいと思います。やっぱりおたがいを知るためには言葉を勉強して、偏見、バイアスがかからないように言葉を勉強したうえでおたがいに理解すればですね、それがいちばん正しいと思います。自分なりの日本観、また韓国観が身につくんじゃないかと思いません。

それともう1つ、距離的にもものすごく近い国が日本と韓国だと思います。

飛行機に乗ると2時間くらい、これは大阪まで行く時間より、また費用的にもかからない。日本人の方も韓国人の方も行ったり来たりして、詳しいところまで相手方を勉強しようとすれば、おたがいの努力のなかで、新しい、明るい日韓関係が生まれるんじゃないかと私は思います。

司会(日本) どうもありがとうございました。ここでディスカッションを終了したいと思います。この話し合いがとても有意義なものになるように、皆さまこれからも日韓関係についてこういった機会を多くもっていただけたらと思っております。どうもありがとうございました。

ではここで、ユニセフの日本・韓国兼任代表でありますク・サミョルさんよりお話しをいただきたいと思います。

ク・サムヨル 皆さん、こんにちは。お話しする前に拍手をお送り致します。(拍手)

ここに参加することとなり、まことに感懐新たです。30年ほど前に韓日外交関係が正常化されて、韓国と日本の学生交流が始まりましたが、私は早稲田大学の招請により、国際学生会初の韓国代表として高麗大学校学生代表団の一員として日本を訪問しました。あの時、日本の友達と接しながら、私たちが持っていた双方に対する認識の多くに誤解があるということを知りました。それによって外交官になるとか国際機関に入って韓国政府の立場を外国に正しく表明したいという夢をもつようになり、それが私の国際機関で働くことになった動機となりました。昔と比べてみて、今日のみなさんの討論は一步進んだように思います。皆さんが一層正直で、ありのままを発言している様子を見て嬉しく感じました。

一つか二つだけお話し致します。

昔は家族計画というものがありました—もちろん、今でもありますが—、それは初めには成功しませんでした。その理由は、解決方を女性の子宮に求めたからでした。言い換えれば、物理的な方法でバースコントロールをしようとしたため、成功しなかったのです。そこで、その解決策を女性の頭に求めて、家族計画が成功をおさめ始めました。それで、今我が国や日本では家族計画という言葉が殆ど消えてしまったのではないのでしょうか？

共感、連帯…心で解決を

ところで日韓関係、韓日関係を私は頭で考えることで解決できる問題ではないと思います。これは心で解決しなければならない問題です。ですから、私たちがその解決策を頭で探そうとすると、加害者、被害者、「慰安婦」、北朝鮮に拉致された日本人の人々などの悲惨さ、これが皆ナンセンスとなってしまいます。ここで重要なことはエンパシー、ソリダリティー、これらの単語がまず先に来なければならないということです。さもないければ、この問題は少しずつ良くなるかもしれませんが、完全に解決はされないでしょう。

私が初めてこのような討論をしたのが1960年代です。ところが、今や2000年代となったというのに同じような話をしています。皆さんの目には世界秩序が力で動かされているように映っても、実際には先を行く人々によって動かされているのです。すなわち、エンパシー、ソリダリティー、ヒューマンケアなどの問題を真剣に悩み考える、先を行く人々によって動かされているということですね。

この度、ノ・ムヒョン大統領が訪日して「前を見据えよう。」と言った言葉は、私たちが過去の歴史を未来まで引き連れて行ってはならない。それを教訓として前を見て進まなければならないという意味です。さきほど地球村の市民というお話をどなたかがしましたが、私たちが地球村の市民として生きて行くには、何をどのようにしなければならないのか？

分析的関係でなく

理解し交流すること

韓日関係において一番恐ろしいことは、過剰なまでに分析しようとする姿勢です。それは夫婦関係においてもそうですし、友達関係も同様です。度が過ぎた分析は結局、否定的な結果だけをもたらすことになります。私たちができることは両国の共通点を見いだしてお互いに対する理解を増やし、交流を広げる事だと思います。アメリカのような国ではジュニア・アブロードというプログラムを作って交換学生制度を実施しています。私たちがそのような制度を取り入れて、日本の大学生と韓国の大学生がお互いに交換学生として勉強し、相手国の文化を学ぶことができるきっかけになれば良いのではと考えます。

empathy

共感

solidarity

団結、連帯意識、一致

最後に、異文化間のコミュニケーションは言葉が通じなければ難しいから、ユニバーサルランゲージである英語を学んで話し合えるようになることが重要です。基金の専務理事である伊勢桃代さんと私は長年の友達です。いつもすべての仕事で同感しているわけではありませんが、私たちが友達になれたのは言葉が通じるからです。さきほど誰かが食べ物のお話をしましたが、お互いについて知ることができ、共通の話題にすることができる、小さなことですが本当に良い主題だと思います。焼肉、刺身、キムチ、おにぎり…このようなことから始めて、少しずつお互いに対して知って行ければ良いと思います。

さきほども強調したように、韓国と日本は共通点が本当に多くあります。皆さんも私と伊勢桃代さんのように、本当の友達となっていただきたいと思います。そのようになれた時、運命的に永遠な隣り同士である韓国と日本が、仲睦まじい隣国、また世界に向けて信用し合える韓国人、日本人となれるはずですよ。ありがとうございます。

司会（韓国） ありがとうございます。最後に閉会のご挨拶を、横田先生、お願いいたします。

横田洋三（YOKOTA Yozo） きょうは皆さん、長時間お疲れさまでした。またご苦労さまでした。

私の印象から言いますと、長い時間でしたが、あっという間に過ぎたような気がいたします。それだけ「次の人が何を言うんだろう？」と思い、話を聞いてみて「あっそうだ。こういうことを教えられた」という、そういう心の中での語り合いが、人の話を聞きながら皆さんの心の中で起こったと思うんですね。そのプロセスがきょうは非常に強かったと思います。

私は国際連合大学、ここの学長の特別顧問をしております、皆さまを歓迎する立場にあります。また、きょうのディスカッションの参加大学の一つ、中央大学の国際法の担当教授としても学生と一緒にこれに参加しました。とりわけこの企画には韓国の側のイー・ウォヌン先生と2人で非常に緊密な連絡をとりながら、きょうここまで準備を進めてまいりました。しかしどうなるかということについては、イー先生も私もまったくわからなかったんですけれども、きょうここで会を開いてみて、そしていま最後になってみて1日を思い返しますと、やってよかったなというのが私の強

い印象です。

何度も言われたことですが、日本と韓国というのは近くて遠い国でした。実際は地理的にも、文化的にも、宗教的にも、あるいは言語的にも近い二つの国であるわけですが、それが少なくとも過去数十年にわたって実は遠い国になってしまっていた。そのなかには日本による植民地支配という不幸な歴史もありました。それについて、多くの日本人は強い反省の気持ちをもっているということは、私から申し上げられることだと思います。

ただ、おたがいに相手の考えていることを十分に理解する機会がなかったために、相手のことを正確にとらえなかった、その結果として、これまでどうしてもおたがいにわだかまりをもって数十年過ごしてきたように思います。きょうのこの話し合いは、おそらく皆さん1人1人、みんなそんなふうを考えなくてよかったんだと、あまり構えて、韓国人たちと話をするとなにか過去のことを言われるので、あまり話をするとなぜいのではないかと日本人の側は思っている。韓国人たちもおそらく日本人はやはり反韓的ではないのか、あるいは差別的ではないのかということで、あまり近づこうとしなかった。

しかし、こうやって一緒に話をしてみると考え方の違いはそんなにないし、おたがいに仲よくしたいと思っているということが判ったわけですね。同時に、これまで韓国人はこうだ、日本人はこうだと決めつけていた考え方は、間違っていたということもみんな認識したと思います。私もそう思いました。いろんな考えが韓国に学生のなかにもありますし、日本人の学生のなかにもある。結局、おたがいに話し合うことによって、いちばん理解が深まるということも認識したと思います。

日韓関係についてはもちろん難しいということがよく言われますけれども、私は世界全体の国際関係というものを見渡すと、日韓関係というのはそんなに大事件ではないんです。中東の問題とか旧ユーゴスラビアの問題とか、あるいはアフリカの内戦の状態にあるルアンダとかあるいはソマリアのようなところを考えると、あるいはカシミールをめぐるインド・パキスタンの問題を考えると、日韓関係は、もちろんおたがいにまだまだ解決していかなければならない問題がありますけれども、少なくともそういう

国々の状態に比べて、国連が心配をして平和維持活動を展開しなければいけないなんて状態ではまったくない。こうやって話し合うことによっていくらかでも将来を開いていくことができる関係です。ある意味では、世界の国々に対して考え方の違いをこうやって解決できるんですよということを示すお手本、見本にさえなるのではないかと私は思うんですね。

世界の見本になるような解決のため、対話継続を

まだこれから私たちのあいだで乗り越えていかなければいけない点は多々あると思います。これは、ひとつ皆さんの若い世代が、われわれが成し遂げられなかった問題を、過去を踏まえて前向きに取り組んでいって、ぜひよりよい日韓関係を築いていっていただきたいと思います。日韓関係がよくなるということは、これをお手本にしてこの周辺の国々との関係もよくなるに違いないと思います。先ほど北朝鮮との関係が出てきました。中国、ロシア、そのほかまだまだ解決しなければいけない問題がこの周辺にもありますし、世界にはもっともっと大きな問題があります。日韓関係がいまのようなかたちでよりよい関係になったとすれば、これはもう国際関係の歴史のなかできわめてまれな、すばらしい見本になる、問題解決の実例になると思います。そういう点でこれからもこういう対話を継続し、いっそうの日韓関係の進化を期待したいと思っています。

アジア女性基金と「慰安婦」問題ということを引きつらねてまずこのセッション始まりまして、韓国の方も、それから日本の学生たちも、『慰安婦問題とアジア女性基金』という本を基礎にいろいろ勉強されたと思います。ところがこの本は数年前に出された本で、最近の状況については触れられていないということがありまして、1つだけ数字を、皆さんが今後誰かに話を聞かれたときに正確に理解していただいたほうがいいと思いますので、それだけ申し上げさせていただきます。先ほどから事実を踏まえるのが非常に大事だということがありましたので。

アジア女性基金のあり方については厳しい批判があるということは、これは事実です。それは率直に受け止めなければなりません。しかし他方で、アジア女性基金がこの8年くらいのあいだ、被害者の方々にいろいろな事業を行ってきたということも事実です。そのなかでも中心的な事業は償い

事業です。これを受け取られた被害者の方は、韓国、台湾、フィリピン、そしてオランダにもいます。この4つの国地域を含めて全部で364人という数字ですので、それは正式にアジア女性基金が事業を行った方々の人数ですので、その数字だけはお伝えしておきたいと思います。

きょうのこの会合は先ほど申し上げましたように、私たちが計画したときにはこのように展開するとは思っていませんでした。予想を超えるすばらしい会合になったと思っております。これはひとえに私が心から尊敬するイー・ウォヌン先生のご尽力によるところが大変大きかったと思います。私はイー先生に心からの感謝を申し上げたいと思います。

このほか、きょうパネリストとして参加してくださった方たち、それから司会者を務めてくださった方たち、問題提起をしてくださった方たち、議論や討論に参加してくださった人、質問してくださった人、それから会場でいろいろな人の話を聞きながらいろいろと考えてくださった人、皆さんに対しても心からお礼を申し上げたいと思います。

この会合は、アジア女性基金と外務省と国際連合大学と一緒に協力して実現されたものです。この3つの主催・後援者に対してもお礼を申し上げたいと思います。それから、とりわけ午前中の通訳をしてくださった方、それから現在同時通訳をしてくださっている方、大変立派な通訳で私たちのコミュニケーションを本当に円滑にしてくださいました。心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

これできょうのフォーラムは終わりになりますが、これが終わりではなくて、おそらく日韓関係の前進に向けての始まりでもあると私は確信しております。その意味で私は1つ提案があるんですが、日本人がいちばんよく知っている、私たちが心に響く韓国の歌は「アリラン」なんですけれども、韓国からの方が20人近くいらっしゃるし、留学生も含めるともうちょっと多いと思うんですが、「アリラン」をですね、1節だけ歌っていただけませんか？ 大丈夫ですか？ ちょっと立っていただいて、恐縮ですがイー先生、音頭を取っていただいております。私たちもハミングぐらいでフォローできますので…。

【アリランの合唱】

ありがとうございました。お返しに日本人の皆さんも「さくらさくら」

を1節だけ歌いますので立ってください。よろしいですか？ 韓国の方もメロディーを知っていたらハミングしてください。

【さくらさくらの合唱】

ありがとうございました。以上をもちましてきょうの日韓学生フォーラムを終了したいと思います。ご協力ありがとうございました。

総合司会(山崎) 皆さま大変お疲れさまでした。以上をもちまして本日の全プログラムを終了いたします。

どうもありがとうございました。

フォーラムに臨む学生のレポート

「既成世代」の感情対立を超えて若者よ、目覚めよ!

イ・ユハク LEE YU HAK

西江大学校国際大学院

21世紀に暮らす私たちは、すでに世界化の波に歩調をあわせて、多くの国の文化と情報を共有している。しかし、どんなに世界化現象が主たるパラダイムになったといえども、我が国の国際関係を発展させるにあたって、近くて遠い国である日本を見逃すことはできない。1500年という両国の長い交流関係において、私たちは明らかに敵ではなく、兄弟国家であったにもかかわらず、韓国においては、現代史の日本の侵略が今日まで痛恨の記憶として残っている。

そのために、今まで私たちは日本に対して色眼鏡を掛けてみて来た。しかし、もう私たちは世界化に歩調をあわせて、日本に対する視角を変えなければならない時である。事実上、日帝が敗亡してから50年がたった今、韓国の若い世代の日本に関する考えは既成世代と差が現われている。2002年の韓日ワールドカップ共同開催の成功、日本大衆文化開放、そして両国の市民運動は、既存の両国関係における要素を変化させた。青少年を対象に実施したある世論調査によれば、日本の学用品を使った学生が92.6%、日本のマンガ本は89.7%が読んだことがあり、日本映画は89.6%が見たことがあるという結果が出ている。X-JAPANや安室奈巳恵に沸き返って日本のアニメーションのマニアになった若い韓国人の数はおびただしい。事実上、日本文化の開放は憂慮した問題をもたらさなかったし、これは日本文化が私たちにとって決して異質的なのではないという事実を教えてくれている。

日本で実施したある世論調査によれば、「多くの外国と交流を推進する時、どの地域の国家に重点を置かなければならないと思うか」という質問に対して「東アジア(韓国、中国)」を指摘した回答の割合が44.9%で一番高かった。また、韓国に対して「親しく感じる」と答えた人の割合は

51.4%、「親しく感じない」は割合は44.0%で、親しさを感じる人の割合は20代の若い層で高く現われている。このような世論調査の結果は、両国の若者が徐々に色眼鏡を外して現実を受け入れているという事実を証明する。

韓日間の不幸な歴史を思う時、これも変化に直面したのではないかという気がする。既成世代は歴史認識を強調しながら、『中への民族主義』、すなわち民族主体性を立てながら、他の一方では外部世界の変化に積極的に対応する『開放的民族主義』を同時に教えようと努力した。このような歴史教育の二重性の中で、日帝による強制占領期を経験した後、植民地遺産の清算、自由民主主義的国家の建設、そして分断祖国と国家統一を考えねばならなかった既成世代には歴史教育において『中への民族主義』、すなわち民族史に対する矜持と度の過ぎた愛国主義精神が特に強調されて来た。それによって、既成世代が、日本と係わる部分においては理性よりも感情を先立たせて、青少年に、日本に対して無条件的な敵対感を強要したことも事実だ。

日本の場合も特に違わないと思う。日本の既成世代は、原爆被爆、戦後国家の建設、経済発展を進めながら、多くの犠牲を強要された。このような過程で国家至上主義、日本第一主義の感情が自然に強調されたと考えられる。

歴史教科書問題や日本の「慰安婦」問題は、歴史問題が両国関係の足首を取って来た(足かせとなってきた)代表的な事例中の一つだと見られる。このような問題において、政府の公式的・外交的立場に依存して解決方を模索すれば、多くの困難を招来しよう。このようなイシューは、両国民の閉鎖的な民族主義感情のみで解決される問題でもない。

これからの韓日関係の主体と要素が変化しているということを前提に、合理的で具体的な問題提起と接近方法が必要だ。感情にかたよった圧力行使は、両国間の建設的な外交関係にも否定的な効果をもたらす可能性が高い。。

教科書問題は地道、かつ論理的な方法で、歴史学者と社会学者を通じて、学問的に具体的な事実を糾明する姿勢が先行されなければならない。また政府のみによるのではなく、NGOなど市民団体との協力を通じて両国の市民社会と若い世代の間の相互理解の土台を押し固めることが重要だ

と思う。何故ならば、私たちの住む世界はもう政府間の国際関係だけでなく、民間レベルでの協力と交流が進行される複合的相互依存（complex interdependence）の時代であるからだ。

日本で右翼教科書採択を阻止させた一番の功績者は、1000回以上集会を開きながら倦まず弛まず問題を申し立てて、沈黙した多数の保護者と教科書採択委員を説得した日本の市民団体だった。「慰安婦」問題もやはりそうである。『軍隊慰安婦問題と日本の市民運動』という本で何回も言及されたように、日本の良心的市民勢力たちは、今すぐの謝罪と賠償金が国家を通じて行われる見込みがないということ認識したから、アジア女性基金という団体を設立するようになったのだ。この団体の要旨は、国民の協力を得て、補償金を総理大臣のお詫びの手紙といっしょに被害者たちに渡し、彼らの要求どおり私生活を最大限保障し、政府も医療、福祉事業を支援する団体に支援すること、二度とあのような過ちを繰り返さないために事実の糾明と歴史教育を体系的にして行くことにあると言える。勿論、補償だけで過去日本人の行った蛮行自体を消すことはできなくて、被害者の苦痛と惨めさの全てを償うことはできないが、これは一人間としての人権が凄惨なまでに踏み付けられた彼女らに対する人間対人間としての人道的な道理だと言える。

このようなイシューに近寄るためには、第一に正確な事実調査が要求される。私たちは、日本の多くの青少年が韓日関係の歴史問題に対して甚だしく認識さえできずにいるという事実を理解しなければならない。理由なくこれらを批判する前に、正確な事実を調査し教えてあげる必要がある。そして、韓国人は民族主義に依存して日本を無条件、かつ感情的に責める前に、日本社会の性格と変化を正しく理解しなければならない。単純なマスコミの報道が両国の真実を全て伝えてくれることはない。明確な事実と歴史認識を土台とした時、両国関係は未来志向的な関係をもって発展することができる。

第二に、このような韓日問題は性急で短期的なものよりも、長期的な課題に触れてその格差を減らすための努力を慎重に行わなければならない。同時に両国政府は両者の間においても、他者との間においても、行き違いや葛藤を調整する窓口を備えなければならない。

今、私たちは、過去に縛られた関係を清算して、歴史から解放された関係で発展しなければならない。これのためには、変化しつつある若い世代が重要な役目をするであろう。覚醒した若者達の思考が今まで縛られてきた両国関係の糸口を解くことができる鍵になるはずだと信じる。

大きな日本のNGO活動。赦すことは勝ったこと

イー・キョンファ LEE KYUNG WHA

関東大学校行政学科

『軍隊慰安婦問題と日本の市民運動』(原題『「慰安婦」問題とアジア女性基金』)を読んで「慰安婦」を見る多様な視角、すなわち被害者と加害者、被害者の肉親、忿怒する女性、贖罪の心を持った日本の男性とそうではない日本の男性など、様々な声が存在するという事実が分かった。いつとき日本を憎悪させた「慰安婦」問題が、いつのまにか私の記憶の中から消えていた。多分に感情的にのみ接していたこの問題について、今回をきっかけとして現実的な観点で眺めるようになった。

韓国人の立場からは「慰安婦」問題は民族問題として見なすこともでき、女性問題として見なすこともできるはずだ。しかし、一つの視覚だけで問題を眺めてはだめだ。女性問題と民族問題、二つの側面を統一して、バランスよくその問題にあたらなければならないであろう。

「従軍慰安婦」というのは、戦争当時に日本軍慰安所に召集されて将兵に性暴行にあった女性たちのことを言う。「慰安婦」は日本軍が中国人女性を強姦したことが始まりであった。しかし性病予防と軍事機密漏出防止という理由で性的慰安設備が備えられるようになったのだ。初めは日本人売春婦を募集したが、人数不足という理由で韓半島まで募集範囲が広げられたとのことで、その時は我が国の未婚女性のみならず、16、17歳の少女たちまでを性的奉仕をすることを知らせないままで募集した。韓国女性以外にもフィリピン、インドネシアなどの女性もいた。戦争中に死んだ「慰安婦」女性もいるから、慰安所に集まった人の数がどの位かはわからない。

1945年8月15日に戦争が終わって、韓国で‘大韓独立万歳’が叫ばれたその時、その女性たちはもう既に人間としての尊厳を踏み躪られた後であり、若い日を生き地獄で過ごし、既に老境に至ってしまったその女性た

ちが補償を受けるためには、徹底的した事実糾明と日本側の謝罪、歴史教育が必要である。また補償をするということだけでは事実を遺憾に思うだけにとどまってしまう。しかし、これさえ順調ではなかった。日本政府は元「慰安婦」女性たちに国家的補償をする気が全くない。恥ずべき歴史の上に、さらに恥ずべき歴史を作っている日本政府を愚かに思う。「従軍慰安婦」制度は「徹底的な女性差別、民族差別で女性の人格の尊厳を根本的に侵害し、民族的誇りを踏み躪ること」であり、これについて人権侵害であると法廷では認めながらも、日本政府は今日までこの問題を捨ておくという矛盾した立場を取っている。

それでも幸いなことは、日本の市民運動が活発に行われるにつれて「慰安婦」問題を知るようになった日本人たちが多くなり、国家ではなく国民がのり出してきて、反省し謝罪するようになったという事である。そのような日本国民の自発的な募金で「アジア女性基金」が創設された。

アジア女性基金は、アジアの軍隊慰安婦被害者たちに補償金と橋本首相のお詫びと反省の手紙を送った。しかし韓国では「軍隊慰安婦被害者たちに対する日本政府の賠償責任を回避するための方便」とであると反撥して、これまで慰労金支給が中断されてきた。これは我が国の人々が、日本の市民活動家たちが償っているという事実を信じていないということである。日本政府のために、正しい考えを持った日本市民たちの真心を受け入れないということは残念な事だ。

キリスト教では、「天下より大事なのが人」とであるという。日本政府が何故に過ちを回避しているのかはよく分からないが、何よりも大切なものが人権であるということを知りたいと思う。過去は忘れて済ませ問題ではなかろう。もっとも重要なことは、赦しと赦しを受ける心がなければならない、また、それをお互いが分かる形で表出されなければならないと思う。すべての人間は、罪を犯さずに生きることが出来ない。しかし、一方で、自分に取り返しのつかない罪を犯した人を赦さないことも罪であると思う。

「慰安婦」の中には、きわめて尊敬に値する女性がいる。それはロサ・ヘンソンさんである。ロサ・ヘンソンさんはフィリピン人で、14歳になった日に二度も日本兵にレイプされて16歳の時には慰安婦を強要され、9か月

の間、昼の2時から夜の10時まで兵士らにレイプされ、ようやく9か月後、ゲリラによって助け出された人だ。1年後結婚したが、二人目の娘が生まれた3年後にご主人は亡くなり、その後一生懸命働いて子たちを育てあげた。人々からの日本人に対する怒りを感じるかという質問に、彼女は、「私は苦痛を受け入れることを学んで来ました。同時に赦すことも学びました。イエス・キリストがご自身を十字架に釘打った者たちをお赦しになったのだから、私も私を陵辱した人たちを赦す心を持つことができるはずだと思いました。(中略)そうは言ってもやはり私は正義が実現することを死ぬ前に見たいです」と立派な返事をした人だ。

もし現在生きていらっしゃる『慰安婦』ハルモニたちがこのような心を持つことができたのなら、たとえ日本政府が過ちを認めなくても、また賠償をしてくれなくても、ハルモニたちが勝ったのだと思う。それはその方々だけだけではなく、被害者側国民たちにもいえる。私たちがフィリピンのロサ・ヘンソンさんのように赦す心を持つことができたならば、日本国民は私たちをもっと尊敬の目をもって眺めることであろう。

韓国と日本の真心が通じ合ったとき解決

チェ・シンジュ CHOI SIN JU

関東大学校北朝鮮学科

韓国での日本現象を示す代表的な事例は、日本文化現象だと思う。これは、日本の文化が韓国社会の中に深く座を占めて来ている特有の現象を意味するのだ。最近、韓国社会では日本文化の開放問題が徐々に強く取り上げられつつある。

私たちはしばしば「日本文化が大挙流入して来ている」と言う。歌、アニメーション、ファッション、映画、キャラクター商品などの日本の大衆文化がおびただしく流入して来ている。韓国の新世代は文化開放が正式に認められていない現在でも、関心のある多様な分野を通じて既に日本文化に慣れている。このような日本文化への同調現象にはさまざまな副作用をも伴うが、考え方によっては両国皆に利益にもなりうる。

日本文化が我が国に流れこみ、私たち若い世代たちが日本文化に熱狂する理由としては、二つの要素に起因していると思う。第一は経済文

化先進国としての日本文化の明らかな位相である。二番目に韓国人が親しみやすい、隣国文化としての日本文化の特性だ。日本文化の性格にはリアル性があり、極めて小さなものでも細密に表現する特性を持っている。また否定的な面では性の開放化による扇情性、そして暴力性を帯びている点である。

このような日本の文化を受容するにあたっては、利益と憂慮を合わせて考慮しなければならない。日本のアニメーションについては作品性と芸術性、娯楽性など、すべての面において我が国よりすぐれているので、青少年及び子供たちまでも楽しんでいる。我が国では『隣のトトロ』、『もののけ姫』、『千と千尋』などの日本アニメが大きく人気を呼んでいる。日本の作品は小さな動作の一つまでも繊細に表現するリアル性をよく活かしているからだ。

青少年は高い水準の文化として、知的欲求を満たしてくれるという満足感で日本文化を好きになる。世界第2位の経済大国日本が生産している高水準の文化に接しながら、韓国文化を更に高い水準へと導いて行く積極的な受容の姿勢が正しいと考える。

一方で、日本の大衆文化の扇情性と暴力性は韓国に育つ若者に幻想を植えつけることで悪影響を与える憂慮をも生む。

私たちは日本文化を探索して、長所と短所を活かし選別力を持って受容しなければならない。無条件に日本文化を排撃する『文化国粹主義』や、あるいは日本文化に追従する『文化追従主義』の姿勢を捨てて、韓国文化をもっと高い水準に進めるよう努力をしなければならぬ。

日本は韓国人と韓国社会に対する偏見と優越感から脱皮し、過去の自己の行動を反省して韓国を理解する姿勢を見せなければならない。このような相互努力の土台の上に両国間の妥協を成り立たせるよう、対策を立てねばなるまい。また、韓国人も日本に対する固定観念を壊して、彼らを赦し妥協することができるよう努力しなければならぬ。

歴史の生んだ課題はこれから私たちの世代が解決しなければならないものである。しかし、このような問題をどのような観点で見るかによって、韓日関係は大きく変わりうる。進取的な韓日関係のために、お互い一歩ずつ譲歩しながら見渡す姿勢を持つことが重要だと思う。

事実を見ず感情的対立で被害者を忘れてはならない

イ・ジウォン LEE JI WON

関東大学校人文学部

軍隊慰安婦問題と日本の市民運動

日帝は戦争を推し進めた1930年代と1940年代に、植民地及び占領地で女性たちを騙して強制に動員し、日本兵の『性奴隷(sex slavery)』として使った。国家が政策として企て、体系的に女性の性的搾取を施行したという点と、日本軍のほぼ全部隊が係わったという規模の点で、挺身隊問題は世界でも類例を見ない組織的犯罪だった。終戦を迎えると、関係資料は上部の命令によって破棄され、戦後、被害者も加害者も韓国社会の儒教的家父長制の雰囲気の中で口をつぐんだので、この問題は歴史の中に埋もれてしまった。

1980年代末、韓国の女性団体によって提起されて以後、アジアの女性団体と人権団体が積極的に加わって、挺身隊問題解決のための運動は国際的の市民運動となった。この運動の目標は被害者の侵害された人権の回復である。そして隠蔽され歪曲された歴史的事実を問いただし犯罪責任の所在を明確にし断罪することで、このような人権侵害が再発しないようにすることが必要だ。

約50年経った時点で、この問題が長い沈黙を破って姿を現わし始めたことは、なによりも人権に対する意識、特に女性人権に対する意識が高まったからだ。この問題は、韓国女性運動団体によって提起され、直ちに日本とアジアの他の被害国、そして人権を擁護し戦争犯罪を防止しようとする世界団体の関心を集めた。

そして日本でも、自分らの過ちを謝って償おうとする動きがおこっている。日本の戦争を知らない若い世代が、自分たちの上の世代が繰り返した蛮行に対して、心から悔い謝る気持ちでよく募金をしたという事実は、金額の多少にかかわらず、私に極めて大きな衝撃を与えた。一人の韓国人として慰安婦問題解決において当事者の立場にしながら、この問題に対してあまりにも無関心だった自分自身を恥ずかしく思わずにはいられない。私は自分自身を平素より民族主義者だと思っているし、日本に対してあまり良い感情を持っていなかったが、その感情が不正確な根拠のない、群衆心

理的で漠然とした感情であったということも悟った。

現在、韓日間で国際法の上の問題として争っているものの、実のところは法的用語を借りてお互いの国民感情を戦わせているに過ぎないと思う。そんな間にも、社会的な蔑視のもとに、羞恥心・貧困・病弱を背負った身で苦難の人生を送る高齢の「慰安婦」女性たちは「慰安婦」という刻印を捺されたまま世の中に背を向けて細々と生きていらっしやるのだ。戦争はずいぶん前に終わったが、その傷は癒されることなく胸中に残り、目に見えない暴力の中で更に深く傷つけられている。

私たちは、いつまで色眼鏡を掛けたまま日本を見つめようか。日本の一市民として「慰安婦」女性に対する償いの気持ちから基金を寄せた純粋な日本市民たちの心を、どうしてねじ曲がった目で見るとだろう。基金に参加した日本市民たちは「政治家」でも「権力者」でもない、平凡な人々である。彼らはただ「慰安婦」問題を大局的に解決しようと思って小遣いや年金から基金を寄せたのであって、国家としての法的責任の回避に加担するために基金に参加したのではない。彼らは元「慰安婦」女性に心から謝りたいという、純粋な心で基金に参加したのである。どうして私たちはそのような人々の心を慮らず、感情的な争いに時間を費やさなければならないのか。なぜ「国家の謝罪のみを要求し」ながら、彼らの純粋な心からの詫びを、色眼鏡を通して見るのか。

もちろん、国家の補償と謝罪を軽視するということではない。しかしながら、そのような形式的な補償よりも、日本の国民ひとりひとりの悔悟の気持ち、そちらの方が一層価値あることだと思うのである。戦争を知らない世代が心から謝り、償う気持ちで私財から寄付をすること、これこそ真に意味ある補償である。このような一人ひとりの真心が集まれば、日本政府の態度も必ず変わるはずだと信じる。そして、私たちの態度も変えなければならない。広い視野と心でこの問題を捉え眺めて解決しようと努力しなければならない。韓日両国民の真心が通じ合った時に、この問題は完全に解決されるであろう。

これからは、感情の争いの中に置き忘れられてしまっている、当事者の方々が無事平穏な余生を送れるよう考えなければならない時である。どこでも丁重に受け入れられて、安らかに生きて行きていけるようにしなけ

ればならない。そうしてこそ、被害者の方々の傷ついた身と心を、多少なりとも癒すことができよう。

ステレオタイプでない話し合いと問題の解決

イー・ジョンミン LEE JUNG MIN

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科（国際関係）＊留学生

「慰安婦」問題とアジア女性基金

「従軍慰安婦」のことについては日本だけの問題ではなく、韓国にも問題があると思う。少しずつ変わっている日本を韓国は受け入れる姿勢が必要だと思う。お互いの主張を聞き、問題を解決するためには話し合いが必要である。

簡単な問題のようだが、マスコミの報道やステレオタイプのな姿勢でお互いの意見交換は進んでいない。このような場を通じてみんなで話し合いをし、解決の糸口を探していきたいと思う。

韓日関係の現状とこれからの課題

1998年から、韓国での日本大衆文化の解禁、ワールドカップ共催などによって日本と韓国の間では文化交流や民間交流が盛んに行っているが、一方で靖国参拝問題や歴史教科書問題などのように過去・歴史問題に関してはまだ関係改善してない状況である。

過去・歴史問題を解決しない以上、日韓の関係はいままでの問題を繰り返すばかりであると思う。

ノ大統領は今回の日本訪問の際、過去・歴史問題について触れてないということで韓国の多くの国民が不満を持っているという報道をみたことがある。

しかし、訪問するたびに過去・歴史問題について言わなくても、両国が過去・歴史問題の重要性を分かち合う関係へと発展していくことを心から願っている。

日本では、韓国・朝鮮について知らなすぎる

小野寺 啓子 ONODERA KEIKO

杏林大学大学院

「慰安婦」問題は、難しい問題だと思う。自分の身に置き換えて考えれば到底許せない。冤罪と同様、罪もないのに貴重な人生を奪われる。拉致事件も、戦時中、空襲や原爆で命を落とした人も、戦地で命を落とした軍人もみんな同じだと思う。そしてどれが一番つらいかなどということは、比べようがない。一度きりの人生が犠牲になるのは耐えがたいことだ。

ただし、「慰安婦」問題に関してほかと違うのは日本国政府が関与を否定したり、見えない部分が多かったりすることではないか。また、被害者自身、思い出したくないとか、隠していることで今幸せなら、わかることでその幸せが崩壊するのが怖い、などであろう。

（「思い出したくない」ということに関しては在日コリアンと同様だろう。私のおじもそうだ。在日であることを隠している人は大勢いる。いとこ達も全員知っているかどうかはわからない。隠している理由はさまざまだと思うが、「思い出したくない」という人も多いと思う。もし、このフォーラムがテレビに流れるなら私は顔や名前を隠すかもしれない。それは私自身のことではなく、家族や親戚のために。）

謝罪と補償

国の予算について詳しくは知らないが、初めの時点からできる限りの謝罪の意志と誠意を見せるべきだったと思う。できればすぐにでもある程度の金額をだせば良かったと思うが、もし無理なら無理で、納得のいく説明をし、心からの反省と謝罪、将来への展望などを述べてほしかった。

タブゴル（旧名パゴダ）公園で会ったあるおじいちゃんは、日本の政府に歯を治して欲しいと言っていた。日本のために戦ったときに失ったとのことだった。あとは謝罪の言葉がほしい。それだけだと言っていた。被害者はただただ金をくれと言っているわけではないと思う。私はなかなか謝罪しなかったのは謝罪したことにより、多額の補償金、慰謝料などを払うことを恐れていたためではないか、と思っていた。それともう一つ、戦後補償は「慰安婦」のことだけではないはずだという思いもあった。前述のとおり、国のために人生を犠牲にした人は他にも大勢いるのだ。この2点

については今回の本でわかった。

政府のアピール

この本（「慰安婦」問題とアジア女性基金）を読んで一番感じたのは「政府の人もいろいろ考えているんだ」ということだ。私が単に不勉強だったこともあるが、報道などによるアピールが足りないと思う。最近の拉致問題にしてもそうだが、その時期一つのその問題ばかり報道されていると、しばらくすると初めは同情していた人でさえ、なんでこの問題ばかり…という思いが浮かんでくる。「包括的なものにこだわると結局何もできない。」と五十嵐元内閣官房長官がおっしゃっていた。そんな考えが政府内にあるなんて、想像もできなかった。毎日のように元「慰安婦」の方が叫んでいる映像を見ていれば拒否反応がでるのも当然だろう。「慰安婦」問題といえればあの映像がイメージされる。特異なものから解決しようという考えなら、次に他のものの解決を図り、それを見せればいいのではないか。原爆被害の次は空襲被害者へ、とか「慰安婦」の次は強制労働者達へ、といった具合に、である。そうすればだれもが納得できるのではないか。

では、補償問題だけで良いのか。人生はお金で買えるものではない。でもいまさら、しょうがないことなのである。「しょうがない」という言葉で片付けたくはないが、歴史上に起こってしまったことは「しょうがない」のだ。ただし、してしまったことへの反省と謝罪はきちんとすべきだ。歴史認識が国によって違っていたり、歴史の教科書の内容が自国に有利になってしまったりするのは「しょうがない」のである。

最近、私のクラスで建国日の話をしていた時のことである。ある韓国人学生が独立について教壇に立って話しはじめるという場面があった。このクラスには他に中国人と台湾の学生がいる。中国人の学生が、自分が学校で学んだ歴史と違うと言いだした。その結論は「しょうがない」であった。歴史の教科書は自国の悪いことより良いことを書くのはどの国においても言えることであるとの認識であった。（事実、韓国で発売禁止になった本には、韓国の歴史の教科書は日本のものよりその傾向が強いといった内容が書いてある。こういう本が発禁なること自体、韓国は情報操作がされているということではないか。正しい歴史認識を無視していることにはならないのか。）

だからといって、「しょうがない」とあきらめようというのではない。将来に向けては、これまでの反省を活かし、例えば「国際歴史」などとして、ある事件に関わる全ての国の専門家が集り、できる限り平等な内容の教科書を作り、各国語に訳せばいいのではないか。幸い今日、インターネットや衛星放送技術のおかげで、各国にいながらにして話し合うことも可能である。

日韓関係のこれから

W杯で韓国の応援をする日本人が多かった。韓国人の集るバーに行ったが、ほとんどのグループが韓国人と日本人のミックスマックスグループだった。私も韓国人の先輩と行った。また、そのとき、前にいた韓国人男性が、私が韓国の応援をしていたことに感謝してくれ、私たちにビールをごちそうしてくれた。

新大久保の”コリアンタウン”に日本人が増え、観光地化してきている。

韓国語で挨拶ができる人が増えた。

カムジャタンやタッカルビが人気になったり、ブルコギバーガーができたりするなど、これまで韓国料理はキムチとチヂミと焼き肉ぐらいだった認識が変わった。

「日韓関係をつくってきた要因」というのは悪い関係のことか。今や良い関係になりつつあり、そのことを含めてなのか。それはともかく、悪い関係については政府のやってきたことが原因だと思う。政府の政策、教育のせいである。マスコミも無意識かもしれないがその手伝いをしている。国民に罪はない。タブゴル公園のおじいちゃん達もそう言っていた。逆に良くしつつあるのも政府でありマスコミであり、今後、大きく動かしていくのもその両者であろう。そして国民レベルの交流も見逃せない存在である。

教育改革が積極的に行われるべきだ。北朝鮮の人は赤い人だと教えたり、独立記念館へ連れて行くなどして日本人はひどいことをしたと教えたりしていていいはずがない。韓国で会った人達は本当に北には赤い顔の怖い人がいると思っていたり、会ったこともないのに日本人は嫌いだったりイメージが悪かったりしている。日本人に実際に会ってみて、印象が良くなった人という人がほとんどだ。私たちが子供の頃、当時のソ連やドイツの人に恐怖感を感じたのと同じではないか。逆に日本では、韓国について

知らなすぎる。総合的学習の時間を有効に使ったり、歴史の教科書をもっと良くしたりするべきだと思う。

私の時代よりは、朝鮮に関する記述が増えているようだが、まだまだである。他のアジアの国についても、もっとやるべきではないか。歴史の勉強の意義と面白さを、もっと子供達に教えてほしい。

韓国と日本は「近くて近い双子の国」だと思う。同じアジア人として、地球人として、手を取り合い、平和で明るい未来を築くために国際貢献していくことが、私たちの課題ではないか。

いままアジアで売買春。太平洋戦争を知らなくては

古口 忠志 KOGUCHI TADASHI

明治大学政治経済学部経済学科

セッション1

相手の価値観、立場を考え、償いやお詫びを押し付けない。相手に受け入れてもらう、または、罪に対して誠意を見せる行動であることを認識する。

もともと慰安所は、“レイプ事件を抑制させるために作られたものである。”という事実がある。→現在、日本の若者はモラルが足りないと言われているように、昔の日本人は倫理観が今以上はあったのではないか？

一部の人間が行った事件を軍部は事実として認識していたのか？ →加害者は国であれ個人であれ、賠償も刑事責任もあるのが国際社会で当然である。このような認識のもとに考えると、一部の韓国人女性が身売りしたことで、韓国の女性全員を一つのカテゴリーにはめて考えてしまったのではないか。ステレオタイプによる考え方は誤解を招くことを我々は認識しなければいけないのだ。

勇気を持って名乗り出てきた人物は貴重ではあるが、それだけで、当時の事実を述べる事が出来るであろうか？ しかしながら、問題は日本政府が、何も提示しないで否定したことにある。本来裁判であつたら「黙秘して無罪を主張している」のと同じことである。

ある意味では、拉致された人々の状況とかぶっている。→拉致された人にも一部は責任があるように「慰安婦」の人々にも責任はあるとも考えら

れる。

私たちがやっていることが韓国の人々に「国民一人一人がお詫びの気持ちを届けているのだ」と感じてもらうことにある。

韓国のマスコミの人々にも、未来志向的な報道を心がけてもらう必要がある。昔からの感情で話されてしまうと、当時のことの誤解を生じてしまうことにもなる。民間の人々を左右させる力があることをもう少し認識してもらい必要がある。

「慰安婦」問題を政治的なものと切り離す必要がある。→そのために、民間的なパイプを今以上作り国民が考えさせる環境を作る必要がある。

考え方が異なる人々が基金にお金を出していることが、どういう意味なのであろうか？

もし、今やっている事が次のパイプを生み出す可能性が少しでもあれば、意味があるのではないだろうか？人間の行動というものは、一日ですべてが認められるわけではないし、一つずつでも「慰安婦」の方々に理解されていく状況を生むことは大変に意味のあることだと考えられる。

「慰安婦」問題がそもそも1991年になってやっと国際的問題になったことも、問題の一つではなかろうか？これは、韓国の文化的価値観も作用していると考えられる。儒教の倫理観の強いために、「慰安婦」の人々に対して「恥」という認識はあったと思われる。国がサポートしなかったために、「慰安婦」の方々は、日本が認めなかった以上に辛かったのではないか？

こうした事とともに歴史の推移によって、事実が曲げられお互いの主張がかみ合わないという結果が生まれているのだと思う。報道を現在行っている人物は、この歴史を体験した人でないことは、非常に問題であり、その内容が新たな誤解を生むことをわれわれは認識する必要があるのだ。マスコミという組織は非常に力があるということは皆さんもご存知であろう。しかしながら、当時からの事実が伝えられなかったことによって、一般の人々はマスコミからの報道をそのまま受け入れているという事実もあるのである。

お金をただ振り込むという活動をするのではなく、被害者の方と直接会って、その方に本当にすまなかったという心を理解していただくのが本当の意味であるように感じる。

そのために、日本人として国際社会の「名誉」を取り戻そうとすると考えてはならない。これが人間としての「反省」であり、当然の行為であるからだ。

日本軍に強制的に連行したという証拠は無いが、一般的に考えて加害者よりも被害者の言っていることの方が事実として受け止めた方が事実により近いのではないかと。そのようである以上、償いの気持ちを出していくということは、正しいことであると思う。しかし、被害者である「慰安婦」の方も、されたことをフラッシュバックしたことによって誇張したことを述べてほしくないと思う。加害者が今現在、すべて生きていない以上、唯一の証拠であるのだからつらいとは思いますが、もう一度現実と向き合って欲しいと思う。金額でそれには誠意が感じられないから受け取れないという人々にはそのことが考えていないのだと思う。その背景に償いを受けると「裏切り」「分断行為」というように非難するというのがあったら自文化中心的思想だと思われても仕方が無いのではないかと。

フェミニズムの台頭による「慰安婦」問題の顕在化 →女性という人権の問題が騒がれてきている…アジアの売春ツアー、会社や社会におけるセクハラ問題も同じように考えられる。日本においても米軍の強制わいせつ問題が今もお問題となっている。本当に問題なのは、このことが戦後からずっと続いている事なのである。今日話した事すべてが、今すぐ変えられる訳ではない。私たちが持っている倫理観というものは、どこできづかれているのだろうか？ 自分が大切だと思う人しか関係ないという風潮は無いだろうか？ その感情がおかしいとは言わない。しかし、どこか他人のこのように考えてしまうことこそ問題なのだと思う。人の立場になって、考えられない現代の風潮を変えるのは他ならぬ私達なのである。かつて、「大東亜共栄圏」という思想があった。→日本の自分勝手な意見だといわざるを得ないだろう。

行動をしたことに責任を持つのは当然であるが、人が生きるということは、自由ということがあって成立するのだと思う。「慰安婦」の方に生きる道を奪ってしまった事を、夢を奪ってしまったことを…。こうした歴史の上にわたしたちは生きていることを。一刻も早い解決をしないと、彼女たちはいつまでも犠牲者でいなければならないのである。

信用がお互いに生まれぬ原因に、日本が謝罪している一方で、アジアにおいていまなお売春を行っていることや、太平洋戦争についてよく知らないことも問題なのだ。謝罪することも大事だが、現在を正しい行動で生きることが大切なのである。正しい知識や認識を持っていないために、韓国の人々と話しても噛み合わないのだ。

レイプと慰安所の違いを、はっきりさせる必要がある。

(韓国の傾向として)「挺身隊」と「慰安婦」との区別が出来ていない。→この誤解によって小学生まで強姦していたのか? という話にまで飛んでしまうのである。歴史の事実の後に繰り返された行動によって、民間の人々に間違った認識を与える形となってしまっている。

セッション2

未来志向で考える。今私たちが、できることとは何か?

サッカーの試合を見ても分かるように日韓戦というのは、特別な感情がスポーツにまで影響していることが見て取れると思う。

現実的に問題となっているのは北朝鮮問題である。アメリカの暴走を止めることが出来るのは日本と韓国であるし、未来的、永久的な平和を求めている私たちは、今こそ手を合わせなければならない。

いつまでも国民感情で対立していることを、止めなければならない。→近くて遠い国といわれる原因となっている。

これからの歴史を作っていくのが私たちである。私たちが変える、変えるべき歴史とは?

「慰安婦」問題は現在もつづく女性に対する犯罪

大原 朋子 OHARA TOMOKO

津田塾大学国際関係学科

1 テキスト*にも出てきていましたが、「慰安婦」問題だけでいいのかという疑問を、私自身も感じました。

以前読んだ本で、このアジア女性基金に対して台湾の元日本兵の方が批判しているのを読み、善意で活動していても新たな摩擦も生じてしまう難しさを感じました。

2 歴史問題、特に過去の日本侵略の問題としての認識が強いように感じ

ますが、ジェンダーの問題としての認識がもっと必要だと思いました。

昔のことなのではなく、今現在でも地域を変えて、無くならない性的犯罪です。頻発する地域紛争や沖縄の米軍によるレイプ事件など、別々の問題なのではなくて、延長線上にあるように思います。女性ももっと積極的に関心をも持つ必要があるように思います。

元「慰安婦」に対して無関心でいるということは、もし自分や友達がこういう被害にあった時に他の人や社会が無関心でも何も言えないのでないかと思います。被害にあったのは台湾人や朝鮮人という前に、同じ女性だった事をわすれたくないです。

私自身、絶対にこんな事の犠牲者になりたくありませんし、時代がちがえば知り合いの台湾の女性が被害者になったかもしれないと思うと、ほんとに許せないです。

* 『「慰安婦」問題とアジア女性基金』 東信堂

W杯共催などで日韓は変わり始めた

森 亮喜 MORI AKINOBU

明治大学政治経済学部 政治学科

セッション1

歴史の認識はそれぞれの国で異なるようだ。しかし、事実は事実として、お互い正しく共有したいと思う。

両国の関係は、歴史的にみて、よい関係だったとは言えない。歴史は語り継がなければならないが、悪い関係は受け継がれる必要はない。過去の問題はきちんと話し合ったうえで解決方法を見出し、その後に尾を引かないようにして、そこを日韓友好の出発点としたい。

セッション2

音楽や昨年開催されたサッカーのワールドカップ等のサブカルチャーを通じて、日韓両国の関係は良くなる兆しが見えてきている。今や大韓民国はここ20年のうちにめまぐるしい経済発展を遂げ、過去に比べれば両国間の行き来も容易になっているし、ITを通じての交流も可能となった。両国の距離は、より近くなったと言えるだろう。

国家レベルでは、まだまだ問題は山積みようだ。しかし、今回のよう

に、私たちが直接触れあい、腹を割って話してみれば、きっと個人レベルで友好的な関係は築けるはずだ。

その積み重ねが、ひいては国家間の関係改善に役立つのではないだろうか。まずはお互いをもっと知ることからはじめようと思う。

一緒にW杯日本戦は見られなかったようだ

若島 鉄平 WAKAJIMA TEPPEI

東海大学文学部日本文学科

「従軍慰安婦」について

日本が強制的に「慰安婦」として戦場に連れてきて従事させていた可能性は十分、考えられる。

「慰安婦」として働かされたことは屈辱的なことであり、ハン（恨）の精神をもつ韓国人であればなおさらである。

「慰安婦」であった事実は極力、他人に知られず隠したいことであるが、それを実名で名乗り出るとは絶大な勇気があることだと思うし、単に補償金が目的であればここまでできないという気もする。

国家間では条約上の解決はできないが、国民はその事実の可能性を認識し、元「慰安婦」の方々に償いの念を持たなければいけない。

元「慰安婦」の訴えをまるっきり、無視するのは大変、危険なことだと思うし、逆にそれが事実であり、全てであると思ひ込むことも今の段階では決定打に欠けると思う。

日韓関係について

ぼくの1年間の留学中に、日本人だからという理由で差別だとか蔑視をされたことはなかった。

韓国の大学での友達は、実に親切に付き合ってくれた。それは特別、見返りなどの期待に基づくものではなく、純粋に友達として接してくれた。

時には留学生ということで韓国人以上に親切をしてくれる人も多かった。大学外でも、日本人であることで個人的に嫌な思いをしたことは、一度もなかった。

しかし、ワールドカップの時に、日本人の友人が韓国人と日本戦を飲食店で観戦したとき、まわりの韓国人は日本の相手チームをまるで韓国であ

るかのように応援していたときいた。

日本がゴールを入れられると全員、拍手喝采し、逆に日本がゴールを決めるといすを蹴飛ばしたり、ブーイングの嵐だったようだ。

そこに日本人がいたことに、たぶん気が付いてないとおもう。一緒にいた韓国人は気まずそうな顔だったというし、それ以降は、一緒に観ようとはいってこなかった。

韓国で、自宅以外で日本戦を観戦した日本人のほぼ全員が「韓国人と日本戦は見られない」と口を揃え、2戦目以降は、日本人の家に集まって観たそうだ。

日本のマスコミでは、日韓共同開催ということもあって、日本が韓国チームを応援している映像が放送されたりしたが、韓国人が日本を応援している映像は見たことがない。あっても、インタビューで韓日共催だから日本と一緒に決勝トーナメントに行けたらいいとか言っていたけれど、日本のマスコミを相手にする発言と韓国人だけのときの行動が正反対である。

個人レベルでの関係は昔に比べたらよくなっていると思うけれども、国レベルでは、まだまだ日本という国に対する意識は変わってないと思った。

韓国の視点を通して日本を考え直す

西田 翔子 NISHIDA SHOKO

津田塾大学国際関係学科

1. 「慰安婦」問題と日韓関係

戦後から現在まで、一人一人が「慰安婦」問題に限らず、朝鮮植民地支配に対して振り返り、反省し、補償を考える機会を自ら持とうとしないまま、すべて「一括解決済み」であると考えているに至っている。

(わたしの祖母は植民地統治時代、朝鮮にすんでいた。彼女の話の聞いていると、そう感じる。)

こうした認識の中で、「慰安婦」とされた人たちは壮絶な体験を負わされながらも政府間の補償だけでなく、多くの日本人の意識からこぼれ落ちた存在であり、もはや過去の問題だとも思われている。

一人一人の女性の痛みを思いをはせることすらしていない。そうした結果、「慰安婦」とは何なのかすらわからない学生がいる。

朝鮮半島からかりだされた元「慰安婦」は、韓国だけではなく、日本でも戦後生活をしている。

「慰安婦」とされた人々に、どう償うべきか考えるのは、日韓問題としてだけではなく、日本の国内への視点ももった上で考える必要がある。

2. 日韓関係の現状

わたしたちの世代は韓国のことを魅力的で身近なものと感じているのは事実。しかし、そのことと今までの日韓関係を考えようとする姿勢とは結びつかない。

在日朝鮮人である友達は、「在日」だからという理由で差別されたことはほとんどないが、「なんで日本に住んでるの？」とよく聞かれると言う。

これは友達の個人的な体験ではあるが、現在の日本人の韓国に対する認識を代表しているように思われる。つまり、無関心なのだ。

これからは、「新しい未来志向の日韓関係」を強調する流れが政治の世界でますます顕著になるだろうし、韓国側がこのような姿勢をみせれば日本政府は手放しでそれを歓迎するだろう。

しかし、韓国との過去に対する無関心・無意識が韓国の人々との個人的な関係の世界において現れ、相手を傷つける。

だからこそ、何度もくり返し言われていることだが、歴史を客観的に学ぶこと、知ること、そして、それを自身の行動に反映させることを、今だからこそおろそかにするべきでない。

韓国では、戦争や被植民地体験が家族の中で語られていると聞く。

日本との決定的な違いは、そこにあると思う。わたしたちは、朝鮮半島を植民地支配したこと、そこに住む人々を犠牲にしたことを、家族の問題、そして自分自身の問題としないまま終戦から今にまで至っている。

今日、わたしたちは韓国の人と友達になる機会を以前より多く得るようになった。彼らと個人的な関係を結び、韓国の視点を通して日本を考え直すこと、韓国の立場を知ること、わたしたちは日韓の歴史を自身の問題として考えていけるのではないか、考えていくべきだと考えている。

盧武鉉(ノ・ムヒョン)大統領の発言は当然

関口 悟 SEKIGUCHI SATORU

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科

国際関係修士課程

ことさら「慰安婦」の問題を提議し続ける事は両国にとってマイナスである。

アジア女性基金の事業は、日本の過去に対する真摯な気持ちの現れであり、補償事業が一応の完了を見たことに祝意を表したい。

日韓関係の現状は、W杯や文化交流により良好になりつつある。しかし常に韓国側からは日本に対し不信の目を向けられつづけているような気がする。

歴史は事実の羅列であり、客観的に見るべき性質のものである。我々は自国の歴史を背負い、その歴史に対する責任がある。しかし、一旦主観的な見方をしてしまったら、盲目の世界に陥ってしまうだけである。

我々はこの点に留意して未来を語る必要があると考える。

今回の訪日における盧武鉉大統領の発言は、それほど物議を醸す性質のものであろうか。

韓国国内の混乱は承知しているが、我々は現在を生きる人間であり、未来をつくる存在でもある。確かに、そこに歴史という重層性があるとはいえ、新世紀に入り、いつまでも過去のことに固執する必要はないのではないか。

これからの時代を担う大統領が過去の問題に触れなかったことは、就任して最初の訪問であることを鑑みると国際儀礼としては当然の行為ではなかったのではなかろうか。

現在、両国には北朝鮮の問題や、その他協調して取り組む問題は山積している。大統領が述べたように、日韓のパートナーシップこそが、この時代を生きる両国の指導者が担わなければならない歴史的使命なのではないだろうか。

問題から目をそらさずともに積極的に解決する姿勢を

鬼原 民幸 KIHARA TAKAYUKI

明治大学政治経済学部

はじめに、今回このような機会に恵まれ、韓国、日本両国の交流に少しでも関わられたことを心から嬉しく思う。「従軍慰安婦」問題は、大きな懸案である。しかし同時に、日韓関係の未来を見据えるうえで、目をそむけることの出来ない問題でもある。「日韓関係の現在・過去・未来～新時代に生きる私たちの対話」。この対話が、日韓関係の進展に、微力ながらも意味をなすことを願ってやまない。

「従軍慰安婦」問題の捉え方

日本の戦争責任を問う重大な問題であると考える。

戦後半世紀を越えるが、人の心に刻まれた傷を、年月を理由に軽んじることはできない。被害者への配慮は、当事者からの要求がある限りにおいて続けるべきである。また、この問題は日韓両国民の感情に大きく左右される問題であり、政府による和解のみでは、被害者の怒りは必ずしも治まらないことを理解するべきである。

「従軍慰安婦」問題の解決へ向けて

両国の国民が共通の認識を持ち、決して問題から目をそむけないことが重要である。しかし、日本の識者の中には、未だにこの問題に批判的な意識をもち、それを公然と発言する者も少なくない。そうした実情と向かい合うためにも、日本人には問題意識の向上と、問題解決への積極姿勢が求められる。この際、条件となるのは日本のメディアの役割である。前述の通り、両国民の認識の差異は、この問題の解決にとっては致命的である。ゆえにメディアは事実を正確に伝え、両国の国民を繋ぐ、まさに媒体とならなければいけない。

「従軍慰安婦」問題の課題

被害者の高齢化が懸念される。後の世代に「過去の悲惨な過ち」として語り継ぐためにも、被害者と直接的に和解をし、問題の解決を急ぐ必要がある。このまま問題の当事者がいなくなれば、「従軍慰安婦」問題は、潜在化こそすれ、日韓両国の歴史的懸案として更にその解決を難しくすることだろう。

「従軍慰安婦」問題の未来像

両国国民が共通の認識を持ち、事実を正確に把握すること。それによって、日本人は「同じ過ちを決して繰り返さない」という意識を強くもつこと。この二点が重要だ。具体的には、日本人と韓国人が接したときに、この問題が話題に上り、対話を通じてお互いの意識を確認できるようになること。そのためには、やはり情報の共有が必要である。

最後に

「従軍慰安婦」問題をタブーにしていては、日韓関係におけるこの問題は解決しない。両国民が臆することなくこの問題について議論し、共通の意識を形成することが望まれる。こうしたプロセスは、両国の未来を希望に満ちたものへと導くことだろう。目先の安定を確保するのも無意味ではないが、地道な積み重ねが必要な課題もある。それが「従軍慰安婦」問題なのだ。

過去は清算、新しい関係—の風潮に危機感

武田 麻衣 TAKEDA MAI

津田塾大学英文学科

日韓関係、「慰安婦」問題について

私が「慰安婦」問題について関心を持つようになったのは、つい最近のことです。

そして、私と同じように、多くの日本人が、「慰安婦」という言葉は知っていても、その実情については知らないことと思います。

にもかかわらず、先日韓国大統領が来日し、天皇と会談した際、天皇は「日本が過去に朝鮮半島の人々を苦しめた」ことについて、初めて言及を避けました。

ワールドカップの日韓共催などを通し、日韓の交流が深まる中で、過去の植民地政策にとらわれ過ぎては「日韓関係が前に進まない」、という考えも、わからないではありません。

しかし、私を含め、多くの日本人が日本の朝鮮半島に対する植民地政策の事実を知らないのに、「過去は過去、もう謝罪した」と割り切ってしまうていいのでしょうか。

また、90年代前半によく教科書に姿を現した「慰安婦」問題についての記述が、今、教科書から削除されようとしています。

日本政府が「日本は反省した、謝罪した」と考えていたとしても、国民である私たちの中には、その事実すら知らない人も、少なくありません。

私は、「過去は清算したんだから、もうその話はやめて、日韓の新しい関係を築こう」という今の風潮に、危機感を覚えています

相互あいさつ運動を提唱したい

白井 一生 SHIRAI ISSEI

明治大学政治経済学部

「慰安婦」問題と日本の対応

歴史問題が我々の世代とどう関わりがあるか

→我々の世代(日韓双方)は直接の加害者でもなく被害者でもない →(在ったか無かったかという事実認定の問題はさておき)常識に照らせば、日本側は謝罪するしかない →今後、過去の過ち(韓国への侵略etc)が繰り返される可能性はあるか? 日本の軍国主義復活阻止のための歴史問題なのか?

心配する必要は多分ない。

→歴史問題はメンタリティを押し量る尺度として存在しているのじゃないか? →若者世代の日本人としては、賠償するとかの問題ではなく、韓国とどう付き合いたいのかという点から態度を示すべきだと思う。

→ただし、この問題はあくまで過去の問題。未来に影を落とすようでは本末転倒。 →この問題が日韓関係の本質でないことを認識すべき。日韓関係の本質はもっと明るいものだから、忘れてはいけないが、強調しすぎてはいけない。

日韓関係の現在と私たちのこれから

日韓は一衣帯水の仲 →日本と韓国は放っておいても関係が生まれる。単純に近いから。 →現在の関係は史上最も緊密な状態だろう。嫌でも付き合う機会は増える。(別に自分は嫌じゃないけど)

→どうせ離れられないなら、好きになったほうが絶対得だ。

日韓関係は民間主導で →交流を止めることは不可能。政府の意思や企

業の戦略とは関係なく繋がりは強くなる。個人的な人と人との関係こそが日韓関係の主流だと思う。→日韓の政治問題は日韓関係の主流にとって取るに足らないものだ。竹島（ドクト）なんて小さな島の問題ごときで仲違いするのは馬鹿げている。

→政治の世界では、外交問題をナショナリズムと結びつけて利用しようとするが、冷静な判断ではない →日韓の間での経済的、社会的なつながりとそこから生まれる利益を考えれば、合理的な選択ではない。政治に惑わされず人間同士の関係で日韓関係を進展させよう！

問題とすべきは身近なこと

個々人の交流において、特に日韓の間で、気をつけるべきは文化的な違い。→確かに外見はよく似ている。親近感を持つのはいい。しかし、実際は異なる文化をもった存在。→似ているから、勝手に変な期待をしてしまい、現実のギャップに裏切られる。→自分達と同じ基準で考えてしまう。似ていても同じではない。

→解決策は何度も挑戦すること。相手から逃げられないのだから、好きになれるまでアプローチしよう！韓国のことわざにある「十回斧を振って、倒れぬ木はない」→接触の機会は確実に増える。上手に付き合えなければお互いに不幸。

提唱

「相互挨拶運動～こんにちは・アンニョンハセヨ運動～」 日本で（韓国で）、韓国人（日本人）に会ったら韓国語（日本語）で挨拶する。外国で母国語を話す人に会うと親近感を感じる。

→これをキャンペーン化する。行く先々で会う人から話し掛けられれば互いに好感をもてる。交流の第一歩は挨拶から！ 勇気をもって「こんにちは・アンニョンハセヨ！」

フォーラムを終えた学生のレポート

歴史的な過ちを繰り返さない——意義ある対話と交流

シン・ジョンア SHIN JUNG-A

西江大学国際大学院国際関係学科

韓日学生フォーラムが終わってから時間が経ったが、その時感じた感情と考えは未だに私の頭の中に鮮明に残っている。「慰安婦」問題を主題にして韓日学生フォーラムが開催されるという話を最初に聞いた時、あまり大きな期待をしなかったというのが事実である。というのも「慰安婦」問題を含む韓日関係をめぐる論争は、これまでもこれといった解決策を見いだせずに大抵が形式的な論議に止まることが多かったからだ。

しかし、このたびの韓日学生フォーラムでは思っていたことよりもずっと多くのことを得ることができた。政治家やメディアではない、純粋な日本の学生の考えを聞くことができ、また、自由に両国の学生の間で意見を取り交わす貴重な機会となったからである。

午前と午後のセッションを通して、「慰安婦」問題と韓日関係の過去、現在、未来に対する討論をしながら、両国の学生の意見を聞くことができた。この過程で、これまで私が知らなかった事実と、私とは異なった視角が存在するということを知った。

日本の学生が「慰安婦」問題を見る観点は普遍的人権問題、あるいは女性人権問題という点であったのに対して、韓国の学生の大部分は民族主義や政治的な観点で見ているという点。次に、大部分の日本の学生が、韓国を植民地にした時代のことに対して歴史教科書を通してはよく学んでおらず、大人になってからメディアなどを通して「慰安婦」問題を知ったということ。

第三に、日本の学生は韓国人が今なお日本人に対して強い反感を持っていると思っているということがある。しかし、韓国人は彼らが思っているほど反感を持ってはおらず、特に若い世代では日本に対してひどい拒否感を持っていないと思う。もちろん、このような現状の裏面には、メディアの影響と教育システムの問題などがあるが、なによりも韓日学生フォーラ

ムのような対話の場が不足しているためだと思われ、対話の重要性を悟った。

韓日学生フォーラムにおいて良かった点は、日本の学生たちの率直さと自由に意思の疎通がとれるように助けてくれた通訳システムだった。直接取り上げるには敏感な問題、例えば、「慰安婦」補償問題を含めた「慰安婦」たちの証言と証拠の存否に関する問題に対して、自分らの意見を率直に明らかにした点が記憶に残った。のみならず、言葉の壁を越えて、お互いに打ち解けて話すことができるように助けてくれた通訳システムが印象的だった。

一方で、惜しまれる点、改善すべ点もあった。

フォーラムの全般的な主題が韓日関係の過去、現在、未来だったが、韓日関係の過去に焦点が集まりすぎていて、現在と未来に対する論議が足りなかったように思う。そしてパネルの意見は活発に出されたが、傍聴客たちの多様な意見を聞く機会がなくて惜しかった。もっと建設的で多様な意見と視角があったであろうと信じるが、短い時間のために十分な意見交換ができなかったと思われる。

このようなくつかの点を補って、次回の韓日学生フォーラムでは普遍的な人権問題や女性問題、韓日文化交流など、さらに多様な次元における問題を深めるように扱ったらよいと思う。

主題によって意見が一致したり、また一致できないこともあったが、明らかなのは、歴史から教訓を得て、二度と同じような歴史的過ちを繰り返さないために、両国の若者たちが政治的問題や民族感情にしばられることなく、真の『地球人』として対話と交流を通じて建設的、かつ未来志向的な韓日関係を築くために乗り出して行かなければならないということである。

このような脈絡で、この度の韓日学生フォーラムは大きな意義を持っていると思う。このように意義深い行事が一過性に止まらず定例化されて、日本と韓国を行き来しながら更に多くの学生が参加するように、対話の道筋を一層築いて行かねばなるまい。最後に、このような場を提供して下さったアジア女性基金と横田洋三教授、李元雄教授に感謝の気持ちをお伝えしたい。

残っている被害者・加害者意識——

「解決」するには率直に話し合うこと

イー・ジウォン LEE JI-WON

関東大学校メディア語文学部

この度の韓日学生フォーラムに参加し、日本の大学生たちに接して話し合いながら感じたことは、「どこでも、誰にでも、真心は通じるはずである」ということだった。誤った歴史教育とメディアによって歪曲された報道、また、それぞれの異なった民族性や育った背景などのために、「慰安婦」問題に対して多少異なった意見を持っていたが、私たちはお互いに真心を込めて意見を取り交わした結果、理解しにくかった部分まで、かなり理解することができた。

韓国の学生は、「日本人は自らが犯した過去の過ちについて謝る気がない。むしろ彼らは過去の帝国主義を復活させようと思っている」と思うなど、被害者意識から脱することができていない傾向を見せた。しかし、日本の学生たちも同じで、前の世代が犯した過去の過ちを意識して、「韓国人が自分らを簡単には許さないだろう」と思っていたり、『慰安婦』についての話を聞いて、日本人として生まれたことに恥ずかしさを感じた」という学生もいて、日本人たちも加害者意識に捕らわれていることを知った。

しかし、「慰安婦」問題とは、加害者と被害者を分けて、金銭的な補償をするだけで、すべてが解決される問題であろうか。侵略に遭い、支配された韓国を含むアジアの多くの国には、多数の犠牲者がいたし、戦争を引き起こした日本でも、やはり多くの犠牲者が出た。巨視的に見れば、これらの数多い戦争犠牲者は、あくまでも当時の時代状況が作り出したもので、単純に加害者と被害者を区分して解決される問題ではないと思う。

とはいえ、被害者たちの侵害された人権被害についての補償は必ずなされなければならない。これはなかなか解決されずにいるが、その原因は、韓国人が慰安婦問題を「民族的な恥の問題」と考え、日本政府の公式謝罪を受けようとし、一方で日本人は歴史問題を国家的な補償ではない、他の方法で解決しようとしているところにある。

このように、それぞれの問題を眺める視角が異なるので、解決が難しくなっているのである。アジア女性基金の活動が韓国と台湾で思うようにい

かななかったことの根本的な理由も、このような視角の差のためである。貧困と病苦に苦しんでいる元『慰安婦』女性たちに現実的な対策として補償金（謝罪金）を支給したが、それを韓国人たちは法的責任を回避するための手段のように誤って理解したのだ。

『完全な解決』を願うのであれば、誤解を解いて、率直に話し合わなければならぬ。それこそが、これまで科せられてきたくびきから脱する、和解のための第一歩であり、新しい韓日関係の手始めである。

私たちは、この度の学生フォーラムで、真心を込めて話し合えば通じるということを学んだ。お互いについてより深く理解したことによって、友好的な韓日関係の小さな足がかりをつくったと思う。これからは既成世代もこのような点に着眼し、広い心と視野でお互いを理解しようと努力をするように望む。そして、これから、私たちのような考えを持つ若者がふえるにつれて、韓日関係の未来はもっと明るくなるはずだ。月日が流れ、私たちが社会で活動するようになった時、韓日両国は、お互いに助け合いながら、ともに成長する関係になれるはずだと信じる。

最後に、このような貴重な機会を与えて下さった李元雄教授と横田洋三教授、そしてアジア女性基金の伊勢桃代事務局長、及び多くの関係者の皆様に心から感謝を申し上げる。

「近くて近い国」を実感。同じ空気、同じ時を過ごした

鬼原 民幸 KIHARA TAMİYUKI

明治大学政治経済学部政治学科

日韓学生のフォーラムに、私は共同司会者として参加した。

広々としたホールに約40人の日韓両国の学生が口の字に並ぶ。各学生の耳には同時通訳用のイヤホン。まるで国際会議に参加したような気分である。

司会進行ということで、韓国側の司会者とコミュニケーションを図りながらディスカッションをまとめる役目。テーマは「日韓関係の現状～私たちはこう変える」。大きなテーマだ。話を取りとめもなく広がりはないか、どう軌道修正するべきか、始まる前から緊張がはしる。ディスカッションが開始され、まず基調提起として、日韓両国の学生による主張が始まる。

司会進行のスタートである。

このセッションはたった1時間。ディスカッションの終了はすぐにやってきた。終わってみればとても短い時間であった。緊張はいつか解けて、心から両国の学生による発言に耳を傾ける自分がいた。議論は過去の歴史に起因する現在の日韓関係における問題を軸として、学生が自らの主張をぶつけ合った。やはり、両国にはそれぞれの主張がある。学生だからこそ、お互いに日本と韓国の一国民だからこそ、それぞれの主張がある。そう簡単に統一見解など生まれるはずもない。

しかし、私はその中にとっても大切な共通認識というか姿勢が現れていた気がした。それは、両国の学生がともに互いを理解しようとしていることである。相手の意見を否定して、自分の意見を正当化しようというような姿勢は日韓双方にまったく見られなかった。自分と異なる主張を理解し、その上で意見を伝えようという建設的な議論ばかりだ。歩み寄ろうという共通の認識、姿勢。近くて遠い国といわれる隣国は、直接に会い語り合ってみると、こうも身近なものか。大きな感動と、晴れやかな気持ちが私の胸に満ちた。

ディスカッションが終了し、韓国の学生が「アリラン」を、日本の学生が「さくらさくら」を、それぞれ歌う。傍聴者も含め130人を超える人々が、大きな拍手をおくった。広々とした会場では、日本、韓国、両国の学生が確かに同じ空気を吸い、同じ時を過ごし、同じ笑顔をうかべていた。

話し合うことを恐れない、共通の土台にたった

久保田 有香 KUBOTA YUKA

中央大学大学院法学研究科

今回のフォーラムは、開催数日前に司会者としての参加が急遽決定したため、当日はかなり落ちつかない気持ちで会場へ赴いた。フォーラムがどんな展開をみせるのか、楽しみに思うどころか不安な気持ちのほうが勝った。明確な議題が提示されていなかったことも、私のもやもやした気持ちに拍車をかけた。

しかし、午後のフォーラムの前にインフォーマルなかたちで韓国側の学生と中央大学の学生が話し合うセッションが設けられており、そのセッ

ションに参加したことで、私のなかの不安は一気に晴れた。確かに、明確な議題について話し合いがなされたわけではない。主に話し合われたのは、少々漠然とした「従軍慰安婦」問題についてで、ときおり様々なレベルの意見が交錯したことも事実だ。が、そこにいた学生たちは皆、確かに相手の意見を聞こうとしていた。皆の意見は率直なもので、そのやり取りには素直に心を動かされた。

何よりも、このような場が設けられていて、一時でも空間を共有できるということ、そのことが参加している学生たちのこれからの人生に少なからず与えるであろう影響を思うと、議事進行で頭を悩ませている自分が馬鹿らしくなり、一気に楽な心もちになったのだった。

午後のフォーラムは、私と韓国側の学生が共同司会をつとめる「慰安婦問題と日韓関係」についてのセッションから始まった。何よりも助かったのは、韓国側の司会をつとめてくださったシン・ジョンアさんが、大変頭のよい方だったこと。私は韓国語が話せないのだが、彼女は米国滞在経験もあり英語が堪能で、セッション中、私たちはずっと英語で細かいやりとりをしながら作業をすすめた。

セッションそのものは、皆の積極的な参加のおかげで、なかなか興味深い展開をみせた。学生たちの意見の傾向を、国というくくりで分類することは難しく、当然のことだが個々の学生たちの意見は様々なものだった。だが、そこには、漠然とだが共通の認識というものが垣間見られ、何よりも話し合うことを恐れないという意識が共通の土台としてあったと思う。

セッション後、シン・ジョンアさんとお互いの労をねぎらい連絡先を交換した。一緒に仕事をしたことで、一気に距離感が縮まりうれしかった。その夜の交流会に私は参加できなかったけれども、夜のうちに彼女に御礼のメールをだした。数日後、帰国したばかりの旨をつたえる返事のメールをもらった。これから「従軍慰安婦」の問題を考えていくとき、私はいつもフォーラムに参加していた学生たちの顔を思い浮かべると思う。この貴重な経験をどう生かしていくか、私に課されたこれからの課題だと思う。

(以上の4人は午後のセッションで司会を担当)

留学中には聞けなかった韓国学生のほんとうの意見

若島 鉄平 WAKASHIMA TEPPEI

東海大学文学部日本文学科

今回の日韓学生フォーラムのような公式な席で、韓国の方と歴史的な話をするのは初めてであった。韓国に留学中に、お酒を飲みながら韓国の歴史を振り返って話をすることはあったが、私が日本人ということを知ることが彼らが配慮してか、今回の主題であった「従軍慰安婦問題」のような話題があがったことはなかった。それどころか、植民地時代の話すらあがったことともなかった。私の留学目的のひとつが、今の韓国の若者が過去の日本との歴史についてどう思っているかを知ることであった。しかし、日本人を相手に正直に腹を割って話してくれた韓国人がいなかったため、その目的を果せなかった。そのためフォーラムでの日韓の学生の意見の交流は私にとって、とても新鮮であり、充実したものであった。

正直、私はこの「従軍慰安婦」について、その認識が不足していた。フォーラム参加を前にして日本での「従軍慰安婦」の事実関係についての学説を学び、自由意思か、強制かという一番の焦点である部分で、両説とも決定的な論証を欠いているという現状がわかった。私の個人的な見解は、「従軍慰安婦」は強制であったとする説が妥当であると思っていた。

実際、フォーラムで意見の交換の中で、韓国大学生の声は強制を根拠とする発言が占めた。そして日本人学生の一部に、自由意思であるとする説を紹介する者もいた。私が予想していた通りの展開になり、核心に迫って意見交流できたことで、韓国人学生からの貴重な意見を聞いたことが、私にとって何よりの収穫になった。

その中でも、韓国側から過去に日本が韓国にしてきたことに対する賠償よりも、歴史の認識と韓国に対する償いの念を持つことに要求のベクトルが向けられていたことや、今後の日韓交流に前向きな意思があることがわかった。韓国側のこのような姿勢に対して、日本側で、大勢ではないとしても、いつまでも頑なに「従軍慰安婦」が自由意思によるものであったと言い張ってはいは、健全な日韓交流が未来に開かれにくいことを確信した。

フォーラム終了後の食事会で、日韓の学生がお互い言葉に苦労しながらも、なんとか意思疎通を図ろうとする光景や、韓国の学生が日本人学生に

配る自分の名刺を前もって準備しておいたことなどから、個人レベルにおいての日韓交流への姿勢は非常に積極的なものであった。

先日、私も、名刺をくれた韓国学生とインターネットでチャットングをした。「韓国に来たら、案内しますよ」と言ってくれた。こうしたフォーラム後はじまった個人的な交流は、私に限ったことではないと思う。

私自身、今回のフォーラムに参加して、以前から聞きたかった韓国人の意見を聞けたこと、韓国人との交流の輪がまたひとまわり大きくなったことなど、得たものは大きい。これらは単にその場限りのものではなく、これからの日韓交流に結びつく要素として、その意義を自分なりに位置づけていきたいと思う。

文化、歴史、言葉…韓国をより深く理解していきたい

金子 正幸

東海大学理学部数学科

私は、私が通っている東海大学の小倉紀藏先生から、「従軍慰安婦の問題や日本と韓国のこれからの関係について討論する場があるから、よかったら参加してみないか」とのお誘いを受け、興味半分で参加しました。

自分の勉強になると思いましたが、まだまだ韓国に対して関心を持っている人が少ない中で、いったいどのくらいの人が自分の意見を主張できるのだろうかとも思いました。自分が一番韓国について知っている、と少し傲慢になっていた部分がありました。

ですから、あらかじめ配布されていた「アジア女性基金」についての資料は、一通り目を通しただけというふうでした。そして、とくに「従軍慰安婦」の問題について勉強したり、これからの日韓関係について十分に思考したりすることもなく、当日を迎えたのです。

当日は、韓日友好のために自分の考えを思い切り語ってこよう、と決意に燃え、意気軒昂と会場に行きました。何も勉強したかったけれど大丈夫だろう、と高をくくっていたのです。

ところが、参加しての—参加したといえるのでしょうか—結果としては、発言というのは、あえて言えば最初の自己紹介だけでした。勉強しなかったための当然の結果なのですが…。ただひたすら他の人が発言しているの

を聞き、メモを取るだけでした。

他の人の意見を聞いて、フォーラムが終わった直後に一つだけ感じた事がありました。それは、自分だけが幸せであればそれで良いと考える日本人が多いと言われている中で、同じ日本人でありながら、しかも韓国と日本の関係についてこんなにも熱く討論出来るということは、本当に素晴らしいことだ、ということです。

ただ、このフォーラムの中で議論しあったことは、絶対にその場限りのものでは終わらせず、私自身も含め、参加した人全員がこれからもまた熟慮を重ねるべきであると思います。なかなかこのような機会はありません。これからも是非続けていただきたいと思います。

会場に、私の活躍を期待して友人が見に来てくれたのですが、期待に応えることが出来なかったことを、今では申し訳なく思っています。また、東海大学の代表の一人として参加したのにもかかわらず、恥をさらす結果となってしまう、いまさらながら、もっと勉強しておくべきだったと反省しています。

結局、韓国について何も知らなかったのは自分の方だったのだ、と感じました。「韓日友好、韓日友好」と口では簡単に言うてはいたけれど、本当に「韓日友好」について考えていたかと言えば、考えていなかったのかも知れません。

このフォーラムが終わってから、「韓日友好」について果たすべき自分の使命とは、いったい何だろうか、と考えるようになりました。

私が「韓日友好」について果たすべき使命は、まず、自分自身が韓国の歴史や、文化や社会について深く学び、日本人の友人と、そしてまた、身近にいる韓国人の友人と深いところまで突っ込んだ対話することだと考えています。それが出来なければ、それは表面的な付き合いとなってしまいます。

「相手の文化や歴史や言語も知らずに、なにが交隣だ」との雨森芳洲の言葉を思い出します。

これを機に、もっと韓国のことを学んで、「韓日友好」に努めていきたいと考えています。

アンケート回答から

～抜粋～

▽セッション1は日本人学生の意見が多く、司会はもう少し韓国人学生に意見を求めるよう振ってもよかった。

「慰安婦」問題にしろ歴史認識問題にしろ、乗り越えるべき問題はたくさんあると思うが、今回のフォーラムのような機会を積極的に増やし、個人間の話し合いによってよりよい日韓関係が築いていかれると思います。

▽日本、韓国の学生たちの意見を聞いて、大変興味深かったです。これからもこのようなフォーラムを設け、日韓の学生同士が議論できる機会があればいいなと思います。(横浜市)

▽韓国の学生の明確な認識、明解な討論、考えの表現能力の高さが際立っていたように思います。日本人はもっと話すトレーニングが必要かと思いました。内容については大変有意義なもので、とても勉強になりました。愛の反対語は憎しみでなく無関心である、という言葉聞いたことがありますが、まさに「慰安婦」問題、隣国・韓国についても、無関心であってはならないと思いました。(横浜市、女性)

▽とくに日本の学生にとっての問題は、日韓関係よりジェンダーにあるように思いました。強者と弱者の関係性への鈍感さ、痛みを受けた相手、声をあげることが出来ないものへの想像力の欠如が、力(経済力、戦力)による支配へとつながってゆくかもしれない…そんな危惧を抱いて帰ることになりました。

だからこそ、このようなフォーラムで生身の人として多様な価値観があることを知り、受け止めていく。方法論ではなく、善し悪しでなく、自分はどう感じるのかを排除されることなく安心して出し合える場が必要だと思います。

日本の学生の「証言だけで信用するのは危険」「昔のことを蒸し返すのはおかしい」という発言は、やっとの思いで声に出すことができた元「慰安婦」の人たち、今なお戦争の傷に苦しんでいる人たちのことを切り捨てていることになりはしないの…。強者が強者の立場にいることに気づかないかぎり、強者が弱者を理解することはできないと思いました。(東京・狛江＝こまえ＝市、女性)

▽今回参加して、韓国の学生が日本を理解しようとしているのがわかって、感動しました。また思っていたよりも、かれらが日本のことを冷静に見ようと努力していることに驚きました。日本の学生として、韓国の学生を見習いたいと思います。

こうしたフォーラムをこれから継続的に開催されることをつよく望みます。一回だけでなく、継続的に開催されることによって本当に意義が生まれるとおもいますので。そうなら、また参加したいと思います。インフォーマルな日韓の学生交流ができる場も、もっと増えるとよいと思います。(学生、女性)

▽私は在日三世なので、日韓関係の中に在日のことが出なかったことに、寂しさを感じました。(女性)

▽歴史の再認識という面では歓迎すべきことであるが、参加した日本側学生の歴史に関する基礎知識が、あまりにも足りないと感じた。基本的な知識があってはじめて意見交換が成立すると思う。

近くて遠いという表現がもっとも適切である。重要なことは、相互の認識ではあるまいか？ 友人間において誤解を解いて率直になれば、親しくなれるように、虚心坦懐に話し合い、解決策を模索してこそ、両国間の友情も芽生えることであろう。(記入されたハングル表記から翻訳)

アジア女性基金について

財団法人女性のためのアジア平和国民基金は、元「慰安婦」の方々への国民的な償いを行うこと、女性の名誉と尊厳に関わる今日的な問題の解決に取り組むことを目的として、1995年7月に発足いたしました。以来、政府と国民の協力によって具体的な事業を実施してまいりました。

元「慰安婦」の方々に対する事業は、1)元「慰安婦」の方々の苦痛を受けとめ心からの償いを示す事業として、国民の皆様のご協力を得た募金による「償い金」のお届け、2)国としての率直なお詫びと反省を表す日本国内閣総理大臣の「お詫びの手紙」、3)政府拠出金による医療・福祉支援事業から成り立っていました。この償い事業は、フィリピン、韓国、台湾において、285名の元「慰安婦」の方々に実施し、2002年9月末に終了いたしました。さらに医療・福祉支援を中心としたオランダでの事業は79名にお届けし、2001年7月に終了しました。インドネシアでの事業は2007年3まで継続いたします。

他方、武力紛争下における女性に対する暴力や人権問題、国際的人身売買およびドメスティック・バイオレンス(夫や恋人からの暴力)など、女性や子どもに対する暴力や人権侵害によって苦しむ方々は現在も後を絶ちません。

アジア女性基金では、過去の反省をふまえ、女性に対する暴力のない国際社会を築くため、国内外に女性の名誉と尊厳を守ることの重要性について啓発活動等、以下の活動にも積極的に取り組んでいます。

- ◇女性に対する暴力のない社会をめざすための啓発活動
- ◇女性が直面している問題についての国際会議の開催
- ◇女性の人権問題に取り組んでいる団体などへの活動支援
- ◇女性に対する人権侵害などについての原因と防止に関する調査・研究
- ◇暴力被害を受けた女性に対する援助者を育成するための研修

財団法人女性のためのアジア平和国民基金(アジア女性基金)
102-0074東京都千代田区九段南2-7-6相互九段南ビル4階
電話03-3514-4071 ファックス03-3514-4072
Home Page: <http://www.awf.or.jp> E-mail: dignity@awf.or.jp



事前に共通のテキストを読んだうえで集まった日韓の学生、留学生 34 人。
初対面ながら熱心に語り合った（国際連合大学エリザベス・ローズ会議場）

財団法人女性のためのアジア平和国民基金
(アジア女性基金)

ASIAN WOMEN'S FUND

102-0074 東京都千代田区九段南 2-7-6

相互九段南ビル 4 階

<http://www.awf.or.jp>

info@awf.or.jp

